

大正六年十一月發行

校友會雜誌

山口縣立萩中學校

第拾六號

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立 秋中學校 校友會雜誌第拾六號目次

○第十七回卒業生記念攝影(口繪)
○展覽會出品優等書畫(口繪)
○皇后陛下御重影奉戴式

講演
一頁

○歐州戰場に於ける所感

會友 福田大佐 五頁

○萩の名産「AYU」

會友 江部視學委員 古谷實君 和原男爵 林一本縣知事 和田準介君 福原男爵

○努力

會友 特別會員 岩田一校長 安藤紀一

○我が海遊事談

會友 三頁

○時味同時

特別會員 岩田一校長 安藤紀一

史料
三頁

○波賀清太夫

○大夫山のしをり

○乃木將軍の書翰

特別會員 岩田一校長 安藤紀一

通信
四一頁

○江木貴族院議員の書信

會友 河野匡四郎 長嶺元二郎

○士官學校だより

會友 長嶺元二郎

○山口高商より

會友 長嶺元二郎

文苑
四五頁

○萩町所感(和歌)九首

第五學年 福原男爵

○長州青年に

同 原田信治

○野心小論

同 鈴木正夫

○繼續的決心

同 松浦孝義

○勇氣を涵養する法

同 久保論

○偶作

第三學年 阿部芳甫

○朋友と知己
○海
○善友と交れ
○僕の好む色
○元氣

同 第二學年 山縣達一

同 第一學年 厚東誠七郎

同 第一學年 黒川克彦

同 第一學年 高田真雄

英文
五三頁

○GET UP EARLY

○WHY JAPAN IS THE MOST POWERFUL NATION IN THE WORLD

○ADVICE TO PESSIMISTS

○ON INDUSTRY

○OUR NATIVE COUNTRY

○OUR TRIP

○九州方面

○修學旅行記
六二頁

○部長及係委員選舉

○各部委員選舉

○劍道部記事

○柔道部記事

○清艇部記事

○野球部記事

○討論部記事

○山口縣體育獎勵會出演記事

○大日本武藝會青年大會記事

○運動會記事

○展覽會記事

○表彰式

○會友訃音

校誌
七八頁

○二宮久氏來校

○長距離競走

○野外演習

○陸軍記念日講話

○福田大佐來校

○卒業式

○賞品賞状の授與

○學友長の改選

○高木男爵講話

○修學旅行

○江部視學委員來校

○古谷實氏講話

○林本縣知事來校

○和田準介氏講話

○福原男爵講話

○小野下關郵便局長講話

○送迎雜報

○附錄



影撮念記生業卒回七十第

山口公立 校友會雜誌第拾六號目次

○第十七回本校生紀念會攝影(五頁)
 ○展覽會出品物(五頁)
 ○本校生之海外生活(五頁)

編輯

○本校編輯部(五頁)
 ○本校編輯部(五頁)
 ○本校編輯部(五頁)

史料

○藤野先生
 ○大友山のふりかへり
 ○大友山の水の音

通信

○日本日報記者の通信
 ○土佐新聞
 ○山口新聞

文苑

○藤野先生
 ○藤野先生
 ○藤野先生
 ○藤野先生

五頁

藤野先生
 藤野先生
 藤野先生
 藤野先生

三七頁

藤野先生
 藤野先生
 藤野先生
 藤野先生

○藤野先生

藤野先生
 藤野先生
 藤野先生
 藤野先生

第二頁

藤野先生
 藤野先生
 藤野先生
 藤野先生

影撮念記生業卒回七十第



畫書等優品出覽展

<p>精華</p> <p>四月十九日第五學年 田中次夫</p>	<p>整風俗 理人倫</p> <p>五月二十二日 第四學年 和田次夫</p>	<p>精華</p> <p>四月十九日第五學年 横山良晴</p>
<p>皇統連綿 天壤無窮</p> <p>四月二十二日 第一學年 福本俊甫</p>	 <p>第一學年 吉村喜熊</p>	 <p>第五學年 林 尙武</p>
<p>第三學年 三好城輔</p> 	 <p>第三學年 松村六郎</p>	<p>蹟績拾捨 栽栽植殖</p> <p>五月一日 第三學年 天野武介</p>
<p>天久文 式成先</p> <p>五月十五日 第一學年 高田文雄</p>	 <p>第二學年 三戸通夫</p>	<p>埋理縁 緑廷延</p> <p>四月廿六日 第二學年 藤本誠二</p>
 <p>第四學年 電海</p>	 <p>第五學年 竹内真一</p>	

山口縣立
萩中學校

校友會雜誌第拾六號

皇后陛下御眞影奉戴式

維時大正六年二月四日、皇后陛下御眞影奉戴式舉行せられぬ。是より先、校長は、本縣廳に出頭して、親しく御眞影を拜戴し、本日、之を奉じて歸校の途に就かる。職員生徒一同は、奉迎の爲、午後二時より、金谷天神祠畔に到り、整列して待つ。程なく、一輛の腕車、警官に護衛せられ、車輪徐に輾りて來る。仰ぎ見れば、御眞影は、校長によりて、車上高く捧持せられ給ふ。職員生徒一同、襟を正し、容を整へ、最敬禮を行ひて、茲に奉迎申し上げぬ。さて、これよりは、第一中隊先驅となり、職員生徒校旗を捧げて之に供奉し、無事歸校して、直に講堂を聖影室に奉安す。かくて、午後三時半より、最も嚴肅なる奉戴式舉行せられたり。此の日、朔風時々凍雲を送り、六花繽紛として、寒威の殊に凜烈なるを覺えき。校長式辭の要領は左の如し。

這回恭くも、皇后陛下の御眞影を奉戴せしにより、兩陛下の揃はせられたる事は、誠に欣喜措く能はざる所なり。我等は、是より一層、兩陛下の御稜威の下に、奮勵努力せざるべからず。

余が 御眞影奉戴の爲に出發せしは、二日の午前七時なりき。山口街道は、積雪深くして、自動車すら通はずといへば、止むを得ず、雪中を徒歩することゝせり。正午頃漸く佐々並に達す。佐々並には、幸に、山口より、雪中の運轉を試みる爲、一輛の自動車來り居たれば、勢力經濟の爲に、之を利用して、山口に到着す。其の夜は、星斗闌干として、一點の騎雲だになかりしにより、明日の好天氣を豫想して、就寝せり。然るに、翌朝に至り、降雪の爲に、道路の白かりしには、一驚を喫せり。午前十時に縣廳に出頭し、御眞影を奉戴す。午後一時、結束を堅くして、一の阪に差掛る。未だ雪多からざりしも、泥濘深く、坂路急峻なる爲、踏滑の虞甚しく、苦難を極む。登るに従ひ、降雪次第に濃厚となり、加ふるに、風強く、艱難は益々其の度を増す。御眞影は、常に、紐にて首に吊し、胸に擁して進む。洋傘を騎して、専念吹雪を防ぎしも、其の効少く、畏多くも、雪は頻りに 御眞影を包む。到底一々之を拂ひ棄つる能はざるなり。一の阪を越え、夏木原に出づれば、天候一層險惡、眞に咫尺を辨せざるの吹雪なり。道路は降り積む雪に埋れて、歩行前進愈々困難を致す。實に積雪二尺以上なり。一行猛氣を鼓して、午後五時三十分、漸く無事佐々並に到着す。御眞影は、直に床の間の上に奉安し、外装を解きて、濡汚なきかを奉檢す。幸に、十二分の包装、油紙二重なりし爲、何等内部に濕氣を認めず。安神することを得たり。而して降雪は猶止まず、益々降り積む。宿直のせま、明日の事を考ふるに、心元なきこと限りなく、恙なく此の重任を果し得んとの見込遂に立たず。惘然決する所なく、

唯、窓外を見て、此の降雪を恨むのみ。明くれば四日、朝匆卒戸を開けば、果して、家も雪に埋れ居る觀あり。但、天氣は極めて快晴あり。しかし、前日全く雪除きありし街路も、一夜の内に、積雪二尺に達す。今日越えんとする新切の阪路は、到底想像も及ばざるものあらん。然れども、躊躇滞在すべしにあらざれば、精氣の續かん限り、御供仕らんと堅く決心して出發す。間もなく新切の坂路に差掛る。諸子、請ふ、これより一層注意して聞かんことを。眞に意外、思ひがけなくも、深雪の中に、半間幅に雪除かれ、踏堅められたる凹道開け、前進何等困難なく、不審限りなし。滿目皚々、道路清白、天氣快晴、一點の汚漬を見ず、歩行爽快、言ふばかりなし。何の苦もなく、一里有餘の阪路を上り切らんとす。頂上に近く、白雪の中に、黑影一隊を認む。皆雪掻を手にし、一列して、御眞影を奉迎するものなり。是れ、佐々並村青年會市支會員一同にして、小學校教員と共に協力して、早朝より、此の通路の雪除をなしたるものなり。中に岡藤よし子といふ女教師あり。健氣にも、裳裾からげ、草鞋を穿ち、男子と共に、此の至誠の作業に、從事努力しつゝあり。余は、感極り、殆ど辭を續け能はざりしも、一同の此の美事を、推獎賞讃して、挨拶をなし、尊き御稜威の深き印象を得て、國家の爲、心中思はず、萬歳を唱ふ。此の邊雪の深さ洋傘の丈を没す。古老曰く、斯る雪を曾て知らずと。眞に驚かざるを得ず。而して猶進む。相變らず道開け、些の苦痛なし。遂に新切の坂を下り終り、一升谷に到る。此の邊、亦、同様なり。一升谷は、舊道にして、平素毫も修繕を加へざるを以て、極め

て凸凹不整なり。されば平素は歩行に艱難を極むるも、當日は、却つて、踏み堅められたる雪路となり、毫も、平日の勞を感せず、歩行大に輕快、難なく明木村に出で、鹿脊阪上に到る。此の行程に要せし時間、三時弱に過ぎず。前日と其の難易天地雲泥の差あり。此等の雪除も、亦、明木村ろれく沿道の青年會員等總出にて、至誠を盡したるものなることを知る。誠に國家の爲、慶賀すべきこと、其の人数より打算すれば、實に、一人一丁宛、此の困難なる雪除をなしたるものといふべく地方青年の誠實なる奉公心の深甚なること、敢て言を要せず、壯快無限なりき。希くば、諸子よく此等の青年會を模範として、國家の爲に盡さんことを

かしこくも、千代にめでたき、大君に、

賤が摘みにし、芹ささげばや。

松陰

講演

歐洲戰場に於ける所感 (福田大佐講演要旨)

田中政太筆記
吉村潤一筆記

私は、一昨年の十月以來、今日に至るまで、露國の野戰軍に従軍して居りました。御承知の如く、今日の戰線は、實に渺茫たるもので、とても、戰況の全般を視察する事は出来ぬのであります。況んや、私は單に一軍に従屬して居つたのでありますから、其の視た所も、極めて狭小なのであります。しかし、此の戰爭に就き、私が、戰場に於て、感じた所が多少ありますので、諸君の將來の利益、或は、參考になるかも知れませぬので、聊、話して見やうと思ひます。

さて、戰の状況は、既に、諸君が、新聞雜誌等で御承知の事と存じますから申しません。寧ろ、戦後の處置を如何にすべきかといふ概念を、諸君に與ふることが必要であらうと思ひますから、其の方面に就いて、述べやうと思ひます。

今回の戰爭が、如何にして戦はれつゝあるかを、一言にして批評せば、あらゆる智力、あらゆる體力を、應用した戦であるといはれます。此の戦に参加せるものは、一千五百万人、毎日の經費は、一億圓以上、又武器は如何にといふに、ごく太古の野蠻人の用ゐたものから、現今最新式の科學の生粹を應用

したものに至るまで、盡く之を採用して居ります。就中、大規模になつたのは、敵をどうかして、根本から滅さうとしたのに原因したので、あらゆる智識をしばり、毎日新しい武器を作つて居りますが、戦争の勝敗の一大原因となるべきは、實に、戦前の準備にありといはねばなりません。戦の初には、獨逸は凡五十年前から、殆ど完備せる武器を用意せる爲、開戦以來一箇月の後に、巴里に押寄することが出来たのであります。後、形勢が一變しましたが、かく佛國に早く入る事が出来たのも、平素の獨逸の準備が、早かつた爲であります。之に反して、佛英は、準備不充分で、佛の如きは、過去六七十年前、城下の盟をして、苦き經驗を有し、復讐を考へて居つたもの、用意が不充分であつて、比較的其の砲數口徑等が、劣つて居つたので、此の如き慘澹たる目に逢ひました。英國は、海軍力と富力とは充分であつたが、陸軍は、初め制規兵が十五萬に過ぎなかつた。併し、國が富める爲、現今にては、佛獨に譲らず、今日は、三百萬になつて居ります。英は不充分であつたけれども、智を用ゐたから、現状を維持し、且つ、露國に武器を供給するを得たのであります。

次に、露國は、十三年前の日露戦争の後、十年間に、あらゆる方面に、大擴張にかゝらんとしたけれども、十年位の日數では、充分でなかつた。開戦當時は、面目を改めし様に思はれたが、實戦になれば、豫期せる如くならず、獨逸の爲、波瀾は蹂躪せられ、今日に至るまで戦敗に戦敗を重ね、あらゆる困難を嘗めて居るが、それでも多くの兵員を出して、疲勞の色がありません。露國の内地に於ては、壯丁全部出征し、且、地方の勞働者も、銀行も、會社も、汽車も、女で代り得べきものは、全部女に代へて居つても、毫も、今後勢力の續かぬ色は見えぬ。我等は、日露戦争で、苦き經驗を嘗めたが、今回の戦後

に、此の如き大規模の戦に、日本が参加して、遜色がないかどうかといふ事は、多大の疑問であります。假に、百萬の大軍を、一箇年出して、疲勞せる色がないとは言へぬ。日露戦争の時は、全部で百萬には達せず、然も後備兵國民軍の全部を召集しても、野戦軍の全部を満たす事は出来なかつた。此の状を歐戦に比すれば、演習の様ものであります。しかも當時の國狀を思へば、今日の如き大規模の戦が、二年三年もあつたなら、我が國力が續くかどうか疑はしいのであります。戦場に居つてかく考ふれば、此等の戦に参加する事が出来んことを悲むと同時に、此の際諸君が、僅の一地方の小問題や、一身の利害榮達の爲に、醒眼として居つたならば、我國は、將來衰微して行く事が必然ではあるまいかと思ふ。故に私が諸君に希望するのも偶然ではないのであります。

現在の歐洲戦亂は、人力、智力、科學を應用して居る。佛の如きも、戦が大規模であるから、兵力の補充が困難で、今は國內の製造工場など、女の代用を許すものは、全部女を使用しても、尙ほ兵が足りない。そこで技術を應用して、兵力を補はうとして居る、獨逸も全く四圍を取圍れて居るのだから、國內だけの資源で戦争して居つては、兵力が足りないから、技術によつて戦闘力を進める方針を取つて居ります。かくの如き目覺しい技術を用ゐて、何故に戦況が長引くか考ふれば、城塞の堅固な點もあらうが、徒に、技術のみを用ひ人命を惜むからであります。此の點より、我が國の將來を思ふに、日本は將來、經濟・科學・技術等に於ては、英佛に對することは出来ません。日本は、もともと、戦の終極が命の取り遣りである事を信じて居る故、科學や富に於て、彼に劣るとも、此の點に於て、此の補をつけなければならぬ。又、此の度の戦争が示した教訓は、國民皆兵で、これは既に我が國の徴兵令で明かな如く、

身分の上下を問はず、職業の如何を論せず、全部兵といふことになつて居るが、世人の總ての觀念は、軍籍に在るものゝみが、戦をする者であると思ふと、多大なかくれを取る。此の點に於て、獨逸は百年前、ナポレオンに蹂られた經驗により、國民全體の武装といふことに於て餘力がなかつた。所が、今は誰も彼も兵に出るといふことは、一千八百七十年佛と戦ひし以來、着々として、準備され、此の傾向は歐洲全部が認めて居ります。佛と雖も、國民擧つて兵といふ氣を有し、兵營教育は短いとして、兵役前、學校で、軍隊の主眼とする精神の鍛鍊身體の強壯を計り、學籍外の者も、法律により、夜學等にて戦法を教へて居ります。いざ戦といへば、銃を打つ方法さへ習へば、直に戰場に出ることが出来ます。

露は人民多き故、かゝる事は出来なかつたが、開戦以來其の非を覺り、十六歳より四十歳までの者は職業の如何、身分の上下を問はず。嚴格なる意志と體力とを養成すべきことを發布しました。かくしても兵が足らぬ。最近に於ては、獨逸では、女でも小數は戦線に用ゐる、司令本部の書記、若くは、タイプライター計算にも、或は、電信電話にも用ゐてをります。

かういふ有様で、繰返すまでもなく、戦は軍人だけでなく、國民全部が戦争に出ねばならぬ。戦争に必要なのは、身體の強健、精神の鍛鍊であります。尙今回の一例として、獨逸の大學生師範學生は、殆ど、全部、中等程度で出て居るものは少いが、昨年の始に於て、六萬人、又、小學校教員は、半數以上、中學大學の教員は約50%であります。要するに、將來の戦は、かゝる戦になるのであるから、國民全體が平常より準備せねばなりません。次に、今回の戦争の原因は、表面簡單である様だが、獨逸民族と、スラブ民族との競争で、それに加へて、獨逸民族と、英民族との競争である。獨逸民族は、秩序的に根本

的に學理的に應用する先天的性質を有する故に、其の進歩は確實で、益々發展して行くから、他と衝突するのは、免れぬことであります。スラブ民族は、かゝる點は劣つて居るが、人口の増殖が大であります。現在一平方哩の人口の密度は、薄うありますが、まだ箇人衛生が發達せぬから、死亡率が高いので、衛生思想が發達せば、生殖力は莫大なものになるでせう。一方英吉利民族は、世界に公布して要地を占領し、通商貿易を發達させて、世界の實權を握らうとして居ります故、獨逸民族と衝突するは、これまた、免るべからざることでありませぬ。之が戦争と變化したのであります。獨逸は、奧太利よりトルコ印度を経て、大陸より東洋に出でんとし、英は、地中海・スエズ・アラビヤ・印度を経て、海路よりせんとして居るので、競争が起り、衝突の原因となつたのであります。如何に戦が終局するかも知れぬが、東洋は、此の二大潮流に侵されて居ります。此の戦の結果は、どうなるかは分らないけれども、自分の考ふる所では、東洋に手を延ばす機會がないとはいはれません。何となれば、一國の元素なる人間が、皆戰場に出て、國內には、婦人・老人のみであるが、生産力には大差はありません。此等の者は、其の技術に既によく熟練して居つて、壯丁が國に歸ると、今までの職は、他人に奪はれて居りますから、更に他に求めねばなりません。さうすると、國內に於ては剩るから、勞外に吐き出されます。又獨逸同盟、及び、英佛聯合諸國との、經濟上の戦は、戦争と同様に、引續き行はれます。又米は御承知の如く、一手に軍需品を引受けて、多くの金額を得て居りますが、製造工業を大規模にして居るので、戦後は、他國に向けねばなりません。さうすると、國外に向ける各國の力は、自由なる方面の、亞細亞に手を出す様になります。此の禍中に立つて居る我國は、數億圓位の少しの金を儲けたといつて、浮氣になつて居る

様では、戦の済んだ時、どうなるかと思へば、實に心配に堪へません。これから考へて見ると、諸君は、區々たる利害や、自分の目先の安逸を貪る様なことでは、我國の將來は心細い次第であります。それか
らも一つ感ずることは、戦はしようと思へは何時でも出来る。其の場合、同盟協約の如きは、一片の反
古となる事があります。伊太利は、獨逸と同盟して居つたが、利害關係から背き、獨逸は、彼の中立國
たる白耳義を蹂躪し、大きな聲ではいれませんが、英といひ、佛といひ、自分の勢力の爲、希臘の中
立を侵して、少しも顧みません。故に戦の済んだ後、各國とも改正の條約が結ばれるであらうか、絶對
的に強き者には、これも義務はない。日本は英と同盟し、露とも佛とも、條約を結んだとはいへども、
他と事を構ふる場合に於ては、埃の皇太子の暗殺の如き小事件より、今回の如き大戦争が起る様なもの
で、條約國があり、同盟があるなどと思つて居ると、皆追放を食つてしまひます。勿論、協商を破つた
なら、それに報ゆる實力がなければ、効果がなく、他の援助に依らずとも、勝てる位の實力を有する
ことは必要であります。思ふに、將來、日本は、甚だ困難なる状態に陥るのであります。其の衝に當る
諸君は、我國の困難なる立場に於て、働くのであるから今から、其の素養をつけることを希望します。
今回の戦争に於て見るに、我國は、經濟・工業・兵力・資根等、まだ、諸國に劣つて居ると思ひました
が、果して此等に劣るとは云へ、忽ち、彼等に勝つだけの素養は持つて居ると確信して居ます。獨逸は、
人口七千萬で、面積人口共に我國と大差はありません。又、今に於て、我と彼の間に優劣はあるにも
せよ。僅か此の五十年間に、發展した力を以て、刻苦精勵したならば、肩を並べることが、忽ち出来る
と思ひます。現在に劣るとも、悲觀することはありません。然るに、私が戰場に於て新聞雜誌を見ると、

私の此の小さい胸を痛めたことも少々ではありませんでした。細にいへば、彼の日露戦争に於ては、幸
に勝つたが、今日、露が獨に對して戦つて居る勢を見れば、或人が、あの戦は、眞にやるつもりでやつ
たのではないと云つたのも、それは負け惜みではあらうが、全く負け惜みのみとはいへません。然るに、
我國では、日清戦争後は、遼東半島を取られて、臥薪嘗膽の語が、盛に流行した位であります。日露
の戦争後は、皆世界の一等國と己惚て、何となく、敵を失つたかの様で、小金を溜ると贅澤になり、小
都會にまで淫靡の風が流れ、小成に安んじて、桃源場裏に夢を貪るといふ風でありました。或は報徳會、
歸一會、精神會等が起つて、矯正しようとしたが、惡風の力が強く、今日まで社會の秩序が亂れ、
僅な生活の餘裕が出来る、衣食を飾り、奢侈淫靡に流るゝ風があります。幸に我が親愛なる御當地に
は、此等の惡評を聞かないのは、喜ぶべきことであります。今日學校で諸君が勉強するのは、一身一家
の爲でなく、一朝變ある時に身を捧げん爲め勉強し、體力の強健を計ることを、切に希望する次第であ
ります。

萩の名産「マン」(江部文部省視學委員講演要旨)

或人が英吉利グラスゴーを尋ねた時、其處の市長に土地の名産を問うた所が、市長は直に肩を聳して、
只一言「マン」と答へた。これは言簡なれども、土地の爲に萬丈の氣焔を吐いたものと感じたので、恥し
くて其の他の事を尋ねることも出来ず、狐鼠々と引取つたといふ話があります。之を傳へ聞いた時、

私自身も、誠に面白く感じました。私は少年時代に、草双紙或は其の他のもので、色々な天下の名士に親んで来て居ます。就中、自分の脈を大きく多く打すものは、若い内に、非常の事業を遣り遂げた偉人の傳記であります。此等の人々の中で、萩から出た方も澤山あります。私は此の萩の名産中で、吉田松陰先生に、非常に傾倒して居ります。「さて見れば左程にもなし富士の山釋迦も孔子もかくやあるらん」と、誰やらが云つたが、名物に旨物なしで、多くの場合は、此の歌の通りであります。然るに、松陰先生のことは、全く之と違つて居ります。私は二十年來、機會あらば、一度御當地に参りたいと思つて居た。然るに、今回圖らずも、公用を以て出掛けた序に、親しく神社に参拜し、先生の肉筆に接し、先生の手澤ある冊子に觸れる事が出来ました。左様な譯で、到底得ることは出来ないであらうと思ふ氣分を得、來て見て、一層感を深うして、誠に愉快でありました。

さて、松陰先生と同じ土地に生れ、同じ水を飲まる諸君に、今私の此の感想を披瀝したいと思ふけれど、之に秩序を與へて、十分お話をすることの出来ぬのは、残念であります。諸君は、常々、校長其の他の先生方、及、家庭より種々の教訓を受けて、勉強し修養を積まるゝことでありませう。先にも申した通り、グラスエーの名物は、「マン」でありますが、萩の名物も亦「マン」であります。過去に於ても現在に於てもさうであります。將來に於ても亦「マン」であるやうにするのが、善い心掛であります。獨逸のランケは「其の國民の生活に於ける黄金時代は、何れの國民にも一度しかない」と、いつて居ります。萩は、過去に於て、世界的の偉人を生み、「マン」の黄金時代を持つて居りました。それを誇とするのは、無理もない様に聞えますが、徒に過去をのみ憧憬して居ては、萩は終に落日の光となるのであり

ます。これは恐らくは、諸君の到底堪へ得らるゝ所ではあるまいと思ひます。かくては諸君自身の發展の前に於て、この世界に向つて誇とする「マン」に對して相濟まぬのであります。青年としての諸君の態度は、將來に於て黄金時代を作ることに努力せられねばなりません。勿論萩以外の所に於ても、多少の「マン」は出来て居ります。萩より多い所も有ります。萩は「マン」に於て、絶對的に偉大なりといふことは出来ぬが、比較的偉大なる「マン」を出したのは確であります。

偉人は、何よりも健康といふことによりて、發揮せられるといふことを忘れてはなりません。現代の青年は、兎角流行を追ひ、柔弱に流れて、活氣に乏しいものが多いに係はらず、今諸君の氣分を想像して見ると、所謂青年の短所から免れて居て、身體を十分に鍛へて、若い血が踊り出で、目的に向つて奮進することが確に認められるのは、非常に愉快であります。

一般の青年には、修養の方面に於て、鐵を本意とした態度が必要であると思ひます。鐵は、鍛へれば鍛へる程良きものになるといふことであります。殊にそれが、日本刀に依つて發揮せられて居ります。私は氣がくさくさするとき、偉人名流の傳記に接してもいけなければ、其の時には、日本刀を抜いて眺めます。さうすると氣が清々してくるのであります。日本刀は誠に男らしいもので、私は世のひよろ／＼者流に向つて、日本刀主義を鼓吹したことがあります。日本刀が只鐵板を切つて、柄を着けたものなれば、誠につまらぬものであるが、鍛へに鍛へて、色々叩き抜いて、人間力・精神力の有ん限を盡した道行は、日本刀の光であります。鐵を本意とした生活は、青年には、最も適當な方法であります。將來に於て黄金時代を作るには、鍛鍊主義・鐵本主義を措いて、外にはないのであります。

次に藝術に就いて一言するが、藝術とは、學問的に云ふと、森羅萬象から受ける印象を組み立て、我々の生活に、平和嚴肅の氣分を味はするものがろれであります。換言すれば、藝術とは、人間の困難制伏の道行であります。彫刻家が能の面を作るときでも、自分の氣に食はぬ時は、幾度でも遣り直す。面と自分の精神とが出會ふとき、向と此方との間に、如何にも調和が取れたと云ふときに、出來上るのであります。之を稱して感情輸入と云ひます。早い所が、諸君が、數學の困難なる問題を解いたときには、密に會心の笑を洩すことが出来るのでありませう。その時は諸君が取りも直さず藝術家になつたのであります。

菊池大麓先生が、嘗て、チャールズ、スミスに或る數學の問題を出されたことがあります。彼は天才的數學家でありますが解けないのであります。四日も五日も掛つても出來ませぬ。菊池先生とスミスとは、同じ部屋に居ましたが、或晩大分夜が更けてから、物音がするので、先生が目覺して見られると、スミスが起き出で、机に向つて、こつ／＼數學をやつて居ます。先生は、聲を掛けては驚くであらうと思はれて、黙つて居られたのであります。翌朝起き出たとき、スミスの顔色が如何にも嬉しうでありましたので、どうかと問はれると、昨夜夢に、有用な公式を思ひ出し、それで問題が解けたと云つたさうであります。人間の努力といふものはひどい者で、今迄隠れて居た能力が、努力の爲に終に出てきたのであります。

結果をのみ挙げやうと云ふ考で、手續の上に力を入れることがない傾向ある現代の青年には、この話は良き教訓を與へるのであります。チャールズ、スミスは偉大な藝術家と云ふてよいのであります。偉

大な藝術家は、又偉大な人物であります。

今茲に、男女の群が盛に嬉しく楽しく遊んで居るとせよ。これを、人間の平和を其の形に示して居るものであると見るのと、何か不品行でもやつて居る様に見えるのとは、其の考へ方に於て、前後大なる相違があるのであります。松陰先生が、刑場の露と消えられたときを考へるにも、唯、悲しいとか慨しいとか云ふことだけでは、駄目である。彼の信する所を察し、彼の有ん限りの力を發揮した、其の男性美を見るところの、力がなくてはならぬのであります。先生を見る工夫は、そこにあるのであります。先生は偉大な性格を發揮しつゝ、瞑目せられたので、それ程の人物を作り上げた所が、藝術の最大なものであります。要するに、萬象を理想化して困難を制伏すれば、人格高大なる藝術家たることが出来るのであります。

諸君よ。諸君は、奮勵努力、以て先輩の遺業を發揮せねばなりません。これは、過去に於ける黄金時代を夢るものゝ出來ることではありません。社會が、前途に於て、努力する諸君に、期待して居るといふことは憊であります。伊藤公が後進を擧ぐるには、許す限の高い所に置いて、後は貴様自分でやれと云はれたと云ふことであります。諸君も、將來ろれ／＼の方面に於て、適當な所に置かれる便宜はあらんも、それ以上は必ず自分でやらねばならぬのであります。

「マン」の繼續發展が出来るならば、大底の仕事は出来ること、思つて、土産として話したのであります。

南洋の話 (古谷實氏講演要旨)

尾崎信一郎 筆記

南洋といへば、如何にも、珍らしい事や、突飛な事があるやうに考へられますが、人の想像する程、變つた土地ではありません。ボルネオ島は、目下久原氏の活動中で、赤道四度半より、北緯二十一度、東經百十六度より、百二十一度の位置にあります。我國と朝の時間夕の差を比較しますに、殆ど、一時間ばかりにすぎません。全面積は、本州・四國・九州を合した程の大きさで、十一萬五千方里あります。私の居る島は、ミンダナオ島で、三萬六千方里あります。海路は、約七千萬哩程ありまして、濠洲通の船がよくきます。内地よりは、郵船會社の船にて、一週間にして、私の居る島までこられます。マニラ長崎間は、三日で達せられます。私は、彼地へ参りましたから、今日まで、まだ一年足らずの月日でありませぬ。それに、私がこんなに早く歸つて來た理由は、彼地があまり物産豊富の爲、自己一人の富を造るに忍びず、多くの青年諸君を誘つて、共に殖産事業に従事したいと思ふからであります。フィリッピンの主産物は、農産物で、中でも、麻が最も夥しい産額を示して居りまして、同島輸出品の四割を占めて居ります。其他、椰子・煙草・昆布・砂糖・珈琲等の産出も盛であります。全島数は、三千百四十一箇ありまして、その中にも、無人島が、随分あります。しかし、禿山は殆どありません。海面から望むと、この島も皆濃き緑で被はれて居ります。しかし、本土一般は、一部の開墾が出來て居るばかりで、荒涼たるものであります。現今では、日本人の殖民従事者は、凡、十萬五千人の數に達して居

まして、既に開墾されて居る土地が一割で、森林が五割、草地が四割の割合であります。故に開墾の餘地は、十分ありますので、政府からも、頻りに殖民を奨励して居ります。土地は、日本人が借りて開墾することになつて居て、内三割は私有地で、七割は官有地となつて居ります。あちらの日本人は、多くは、會社を設立して事業を營んで居ります。次に土地は拂下の法があつて、これを買収することにする、一千二百五十町歩までは、一町歩拾圓の割合です。又之を借れば、二十五年間の契約で、一年一町歩の借料が五十錢の割合です。但し、米人或は蕃人の名義でなければ、借ることも買ふことも出來ないの了すから、各會社には、皆米人或は蕃人の名義を借りて、事業を營んで居ります。

次に麻に就いて一通り御話しますと、先づ土地を買ひまして、ろこの樹木を切り倒し、之に火を放つて小枝を焼き拂ひ、灰を肥料とします。その肥料によつて、麻を作るのであります。こうして植えつけた麻は、十八箇月乃至二年程の期間で、十分に成長します。濕氣を好みますので、雨の多い土地には、殊に栽培が盛んであります。草取は一年に六七回之を行ひます。段々と成長して、一年目頃には、殆ど、大人の丈を凌ぐ程になります。ろれから尙成長して、十八箇月目ごろになりませぬと、枝は大に繁榮して、中は丁度トンネルの様で、牛馬でも通行が出來ます。枝の爲に日光を遮りますので、宴會などの場所として、集合することもあります。十四五年間も立ちますと、木は古株となりますので、麻園の掃除は、年二三回で、草取の勞は省けます。かうして出來た麻を、ホローと云ふ刃物で切り倒します。次に其の皮を剥ぎますが、その皮は丁度芭蕉の皮とよく似て居つて、硬度は筍の皮に等しく、且つ皮は、十五六枚程重つて居て、ろれを漸次に剥ぐのであります。そして表皮に近い三四枚を第一番と稱し、内部に至

るに随つて、二番、三番と名けて居ります。第一番の部分は、質が粗悪なので、捨てますが、内部に近くだけ繊維が充實して、實用に適します。皮を剥く時は、二寸位の幅の切目を入れて、これを剥ぎ取り、ハコタンと稱する双物の着いて居る器械で、その皮の繊維を取るものでありまして、長さの長いもの程が高價であります。あちらの民家は、大底二階造で、下に家畜類を飼養して、上に人間が生活して居ます。家の建て方は、雑木を用ゐて、屋根は皆麻皮で葺きます。そしてそれが一兩日の内に完成するのですから、簡単なことは想像がつきませう。さて、剥き取つた麻の皮は、半日位乾燥して、その濕氣を去つたものが、成品であります。そのものを労働者は、水牛を用ゐて諸々に運搬するのです。水牛は唯一の運搬機關で、我國の牛の二倍半の働がありまして、一頭平均百五十圓位です。麻の成品の一把を一ヒクルと稱し、百斤ばかりの重さがあります。此の時に最も必要なことは、麻の選擇でありまして、選擇者は、五六年の經驗を得たものでなければならぬのであります。船舶に積みて運搬するには、百把以上に限ります。日本人は、味噌醬油等の日用品と、それを交換します。次にいよ／＼外國に輸出することになりますと、これを包んでその上袋に、神戸横濱等と、受取所の名を書いて、輸出するのであります。麻の話は、これでざつとすみませんが、本邦人が、今盛に麻の事業に従事して、多大の利益を占めて居ることは、諸君に御記憶して戴きたい處であります。

次に椰子の事に就いて、一通り述べようと思ひます。麻の方は、十八箇月で成長しますが、椰子は、土地のよい處で五年、普通の處で六七年で成長します。その六七年間の栽培資本は、實に大したものであります。本邦人は、先づ麻を栽培して、その方で得た利益を、椰子の栽培にうち込むのでありますか

ら、その實を得るに至るまでは、五十年百年の長年月を経なければなりません。それでこれは子孫繼續的の事業であります。私等は、土人等とよく山中を歩きますが、渴を覺ゆる時は、いつもその實を取つて食します。土人は巧にそれをナイフで切つて、實を割つて、中の液部を洗ふのです。大きいものになると、地響を立て、落ちるのです。土人は三つ位は食べます。實の内部は、コアラと稱する白色の果肉が固着して、牛乳と砂糖とを混じつた様な味で、滋養分に富んで居ますので、菓子などを作ります。今日では、コアラを市場に出し、又外國にも輸出します。このコアラよりは、椰子油を取り、製造の結果、蠟や石鹼を作り、尙、香料及び酒を作る等、用途頗る莫大であります。其の皮は、土人がよく足につけて、甲板などを磨いたりします。繊維では、箒や刷毛等をつくり、核にては、杓子、コップなどを造ります。幹は堅實ですから、建築材として用途廣く、日本では、床柱や大黒柱に作ります。又新芽にては、トハの酒を製造するを、需用は頗る多いのです。椰子の實は、一年に平均六十箇位あります。落ちた實は、自然にその養分を母體より取りて成長します。四五箇月目には、綺麗な新芽を出します。芽がでると屋根にて蔽ふた畑に、苗を集めて、生活の獨立を確認した上で、廣き畑に移植するのであります。次に植付けの際には、各間隔は十米突位取つて植ゑます。それは、七八年の後には、一丈五尺もある葉を生じて、木と木とが接近して、その成長を妨げる故、それを防ぐためであります。これを麻に比しますと、麻の方は、一町歩について、千本の割合ですが、椰子は一町歩について百本の割合です。しかしまだ始めの間は、木々の間に、大豆・小豆・隠元豆等の栽培を行ひ、一町歩にて四五俵の収入があります。しかし椰子の栽培は、期間が長くかゝるので、どうしても、子孫的事業たることは免れません。其の他全畑

の三分の一は、煙草の栽培に與へられて居ます。砂糖もよく出来ませんが、臺灣地方程によくはありませぬ。米も年二回位出来ず。フィリッピン島には、イプロ等稱する人種が居て、奇妙なことには、臀部に尾を持つて居ります。此の人種は、水田を造るに巧にして、階段式水田は、此の人種より以外の人種には、出来ません。人口は約三十萬で、島の北方に住むものであります。家は、中には、日本古代の建築に似たものがあつて、日本古代の風習を忍ばしめず。此の民族は、平素は裸體で、禪をしめてをのみです。フィリッピンの小學校では、皆英語を教へて居ます。

次に、あちらに滞在の日本人の生活に就いて、少し話させよう。ダバオ河を中心として、五里四方に二千餘人の日本人が住んで居ます。大底會社に出勤します。其の内五六百人は昨年、五百人は今年移住したものでありまして、年齢は十六歳より四十二歳までの人であります。先づ入港しますと、あちらに滞在の本邦人は、盛に歓迎して呉れます。労働者の月給は、大變によろしく、私どもは、最初二十五圓の月給でした、初の一週間は、一寸疲勞を感じますが、一箇月も働いて居ると、仕事にも趣味が湧き、月給も昇りますので、大變に愉快です。段々熟練を積んでいきますと、雇主の信用も厚くなり、主人と共同的に、事業を行ふ様になります。次に資本が多少出来て、麻を買はんとするには、時價約一本が七十錢で、一町歩千本を七十圓位で、手に入れることが出来て、殘金は追々に拂込むのであります。しかしながら、一度之をもつと、一年の末には、約六百三十圓位の利益があるやうになつて、自分が他に雇はれないで、獨立して事業をなすに至る位は、そんなに困難なことではありませぬ。一町歩までは、自分獨で栽培することが出来ず。それによつて、十八箇月間の費用が、四百五十圓位かゝります。そ

の外尙二百五十圓の費用を要するのであります。とにかく、十八箇月間に、七百圓の資本を投するので、しかし、第一年間の収入で、資本の取り返しもつきます。

日本人と土人との關係は、よほど親密でありまして、一寸會ふと兄弟の様な氣がします。土人は男女共に髪を長くして、色彩の濃き鉢巻をして居ります。又耳首などには輪を飾つて居ります。如何にも我邦太古の風俗が忍ばれて、なつかしい氣がします。彼等の住む土地は、他國の領土となつて居るので、洋人を非常に嫌らうて居ります。

話は一寸變りますが、現今日本人の所有して居る全麻の數は、約三百萬本、椰子十萬本、畑數一萬町歩であります。その内で、大田會社は、約四千町歩の畑を有して、最も有望であります。移民の關係は、あちらが米領であるだけに、規則が中々嚴重であります。虎眼・十二指腸蟲等は、勿論上陸を許しません。又計畫のない流浪民等は、決して迎へません。又契約移民なるものは、此地に上陸することは出来ません。しかし日本を出る時は、契約移民の名で出るものであります。それは唯形式ばかりで、あちらに行きますと、契約移民なる名は、除くのであります。其の上米國は、労働者を雇ふにしても、なるべく土人を雇うて、日本人はなるべく雇はぬ様にして呉れよと云ふて居ります。それで會社等を設立するにしても、或る數人の米人土人等を使用せざれば、これを許さないさうですが、これもやはり形式に止ります。商業は大變に有望であります。土人は極めて珍奇を好むので、例へば、光澤のある十錢銀貨を、古ばけた二十錢銀貨で求める様なものもあります。その上便利なことには、あちらの貨幣は、十進法でありますから、日本の貨幣と換算上、大に便利であります。

次に今度は、私共の日常生活の、あらましをお話しませう。一般に、氣候は、生活に適して居ります。朝から晝までは、丁度内地の春の氣候位であります。皆六時から出勤しまして、十二時半に晝食を致します。頭はいつも明晰で、日本の春の様に、ぼんやりとする様な氣はしません。それから午後二時になると、大底寒暖計は九十度を示して居ます。しかし體へは八十度位にしか、暑さを感じません。夕方近くになりますと、大粒の夕立が、篠突く様に降つてきて、直ぐ止みます。その頃になりますと、私どもは近邊の河に泳ぎに行きます。かへりて夕食を致しますと、濕を帯びた庭のあちこちに、螢の光が見えます。それが如何にも南洋的の氣分を興へて呉れます。夜中十一時頃までは、或は讀書に、或は談話に、夜を更します。午前三時半から四時頃になると、俄に冬がきたかの様な寒氣を覺えます。此の際その寒さに堪ふるだけの用意は、必要であります。夜明け近くになりますと、氣候は平素の暖かさにかへります。それでフィリッピンの氣候は、丁度一日中に四季がやつてくる様なものです。日本よりは氣候上生活は易いやうです。しかし、外人には多少不適の點も見えます。熱帯地方に行くとき、いかにも、猛獸が多いやうですが、あちらではそんなことはありません。唯、鹿・猿・野豚等が居るのみで、草原に住む青蛇は内地のはぶの如きもので、多少毒を持つて居ります。しかしこれが爲に、斃れた人はまだありません。兎に角、今迄申しましたやうに、土地は廣く、殖産は豊で、氣候は温和であるし、又人物が一般に低級であります。所へ、日本人は非常に活動して居ますから、實に吾人青年の、南洋に向つて發展すべき時であります。目下、政府では、頻りにその策を講じつゝあるのです。フィリッピンでは、早晚獨立を宣言するさうですが、これは日本にとつては、好機會だと思ひます。フィリッピンには、上下兩議院

があつて、下院は華人九十人より成りて、議長をケッセンと稱して、三十歳の青年であります。又上院は九人よりなりまして、オスメニアンと稱する人が議長で、獨立の曉には、大統領ともなるべき人物であります。一寸附け加へて置きますが、土人中のモロー族と云ふのは、高級民族として、相當の待遇を受けて居ます。日東オリンピック大會等には、いつも優等の成績を得てかへります。これを以ても、土人の體力のいかに強健なるか、分ります。これで南洋のお話は終ります。終に臨み一言申して置きたいのは、將來有爲の青年諸君は、宜しく、昔の父母の膝下を去らない主義を抛棄して、無盡蔵の開拓を勉め、益々世界的文明の爲に、貢獻せられんことを祈ります云々。

努

力

(林本縣知事講演要旨)

今日は、本學年中第二學期の初で、諸君が數十日の夏季休業中、各種の方法により、一段の健康を増進し、新鮮なる頭腦を養うて、再び茲に集られた其の第一日に於て、私が諸君にお話して、聊、参考に供したいと思ふことがある。

今、私が諸君の面前に立つて、つくづくその容貌を視るに、諸君の、學生らしき頭髮の刈り様、甲斐々々しきグートル姿、健全なる皮膚の色は、誠に立派な學生の徵象である。私は之に接して、實に、湧くが如き快感を禁じ得ない。

さて、諸君は、第一に、健康を貴ぶといふことを、心掛けねばならぬ。諸君の前途は洋々として春の

如く、今より數十年間の前途を持つて居られるのである。私は諸君の前途を考ふるに、此の長い間に於て、諸君の能力が、何の邊にまで發達するであらうか、とても我々の想像の及ばん所で、我々如き、相當に世の中の道を通つてきたものより見れば、羨望に堪へぬのである。私は出来ることなら、再び諸君の如き境遇となり、教室に出で、學問を遣り直したい位に思ふ。過ぎ來し方を顧ると云ふと、慚汗背を濕すことが多い。非常なる不勉強、非常なる不養生をして、それはど損をしたか知れぬ。かくして、今少し發達することが出来るであらうと思はれる智能を、進める機會を失ふたのである。思つて茲に至れば、まことに残念でたまらない。さて、私の前途は、先づ十五年か二十年、今少し健康なれば、二十五年もあろうが。纏つて、諸君の前途如何と見るに、五十年以上もあるでせう。此の間に於て、諸君は、身體を鍛鍊し、智能を啓發して怠らなければ、其の發達することは、蓋し窮極する所はあるまい。

諸君は、年の立場より、其の前途を考へてごらん下さい。將來平凡凡たる人間として一生を終るか、或は一世に名をなす人となるか、如何にせば、功勞を立て、國家に貢獻することが出来るか、これ等の事柄は、今の時代に於て考へて置く必要があらうと思ふ。日を積んで月となり、月を積んで年となるから、今私が話す事柄は、四五十年の先の話ではなくて、目前の話であります。

如何にせばえらくなるか出来るか。私は此の點に就いて、諸君の参考までに話して見たいと思ふことがある。今諸君が、此處にこれだけ集つて居らるゝが、其の性質と云ひ、體力と云ひ、將、能力と云ひ、一人として同じ者はない。而して、此等のものは、吾人の取り代へることの出来ぬものである。即ち、甲の體力を取つて乙の體力に代へ、乙の能力を以て甲の能力とすることは、到底不可能の事であ

る。しかし、此の取り代へることが出来ない爲に、貴ぶべき個性、即ち個人の存在といふ事が認められる。私が諸君の前途に對して希望するのは、此の個性を發達させることであります。之を出来るだけ延長し、助長させるのが、人間の務であると思ふ。諸君の父兄の方は、諸君の前途に對して、非常な考慮を費され、諸君の頭腦明晰に、身體の健康ならんことを希望せられ、諸君は、又、自分の立場より、心身を十分に發達せしめたいと云ふのが、終生變らぬ希望でなくてはならぬ。人間には、能力體力共に發達進歩する素質があるにも係はらず、之が發達を務めないことになれば、いつまでも吳下の阿蒙で、五十年を経過し、遂に平々凡々で終らなければならぬ。其の時に至つて、如何に慨嘆するとも及ぶことではない。此の點に就いて、諸君は、長い前途に於て、大なる意義を以て、努力せられんことを望む。自己の能力を延長し、其の分量を飽くまで發達させ、以て個性の完成を期し、父母の心、天の目的に叶へると云ふ自信で遣つて貰いたい。此の如く志して勉強すれば、之が諸君の努力の全部で、其の外には、何も望む必要はありません。世の中に、一身を過つて、遂に恢復の出來ぬ様な破目に陥るものゝあるのは、此の信念を失ふからである。一體、人の個性を羨むのが間違の初で、これは、自己の存在に對する敬意を失うて居るからであります。

世の中には、一代の間に、分不相應の富を作つて、成功するものがある。此の中には、努力をしないで、努力以上の結果を來すものも、稀にはある。けれども、諸君が見らるゝ様に、左様に單純なものではない。舟成金の如き、突然の事實の如く思はれるけれど、其の人の努力苦心は、容易なものでない。それを單純な様に考へるのは、社會の狀態に對する智識の缺乏、原因と結果との連絡の足らぬ所から

る誤解である。運不運と云ふことも多少はあらうが、人の知らない苦心が大にあるのである。水戸光圀公が、「見ればたい、何の苦もなき、水鳥の、足にひまなき、我が思かな」と歌はれた如く。はたから見れば、楽な様だけれど、大なる苦心が存在して居るのです。成功には必ず努力を伴ふもので、將來成功せうと思ふものは、時々刻々、努力を積み重ねねばならぬ。自己の個性を尊重し、能力の分量を、何處までも發達させねばならぬといふ大精神に於て、努力を積み重ねば、其の成功は疑ない。かくすれば、假令成功せずとも、良心の満足は得られるのである。我々の貴ぶべき所は、結果よりも努力にあるからである。人の成功を羨むな。努力せよ。これが、諸君の前途、數十年間に於て守るべき、信條であると思ひます。

終に臨み、諸君に一つの宿題を提出する。それは、「頭の善い」と云ふことは如何なる意味か」と云ふことで、此の定義を通俗的に下して貰ひたい。試に、私が定義を下せば、頭の善いと云ふことは、「事實に近い研究をする」と云ふことではないかと思ひます。若し、私の此の定義が、誤りがないとせば、同じく本を読んで勉強し、社會の事實に就いて考へるにも、どういふ事が、事實に近いかと研究して行くのが、頭の善くなる方法であると思ふ。これは、諸君が、實際問題として考究して貰ひたいのである。事實に遠い頭を持つのは、成功は覺束ない。此の如き人は、終に人生の失敗者となつて、溝壑に陥り、不健全なる思想を抱く様になるから、注意すべき事でありませう。

我が海運事業 (和田準介氏講演要旨)

横村良晴 宣介筆記

私は船乗でありまして、本校を明治三十五年の春卒業致しまして以來、今日に至るまで、海上生活を續けました。さて、私が船員を志望したのは、明治三十二年の丁度今時分で、當時大島商船學校校長菅野敦吉氏が、本校を訪問せられ、海事に關する講話をせられました。その講話の中に、「日本の船舶は、數は多いが、船長其の他シニニア、オフィサーには、外人が多く、日本の船員は、シニニア、オフィサーに過ぎない。然るに海外に於ける船舶を有する諸國は、法律により、其の國の國籍を有せぬものは、船長士官等になることは禁じてゐるが、之に反して、日本では、前述の有様である」と云ふことを聞いて、大に感じました。それ以來は、決心して、家庭・親戚・其他の者から、私の船員となることには、非常に反對がありましたに係らず、これを卻けて、最初の志望の狂けずに、商船學校に入學致しました。其の後、不思議なことには、菅野氏が、一昨年、商船學校の練習船の船長として來られ、私とそのチーフ、オフィサーとして、二年間職務を執りました。

さて、今日に至つては、その當時の状況は一變して、我商船の噸數は、約百七十萬噸に達してゐます。而して、世界商船の總噸數は、五千萬噸であります。然るに其の半分は、獨逸に抑留せられ、或は軍事に用ゐられ、殘る半分も、度々潛航艇の爲に襲はれ、日々損害を受けつゝあります。然るに我國の百七十萬噸は、歐洲戰の爲に、十五六隻やられたが、しかし、無事で、日章旗を揚げて居る商船は、世界到

る所の港を縦横に航行し、外國人の高給船員も、全部驅逐し、會社の關係上、居残るものが、兩三名あるが、これも追々淘汰されるでありませう。次に、我國の造船能力は、日露戰役後、すんたく發達し、昨年は、十四五萬噸、本年は、三十萬噸の盛況に趣き、何れにしても、すばしい勢で、我國が海國として、今日の如く發達せる狀況を、諸君に話し得るのは、誠に快心に堪へぬのである。

一體、海上にある船員の活動は、實に活潑なものであるが、オーシアンに對する國民の態度は、實に冷澁である。その原因は、歴史的關係もあらうが、何れにしても、海に對する思想が、比較的乏しいのは、甚だ遺憾な次第であります。日本人は、陸上に於ける智識は進んでゐるが、海に關する智識は、至つて乏しい。東京や、其他都會の停車場で、廣告や繪畫を見ても、波濤叫ぶ雄大な圖がなくてはならぬに、何處を見ても、陸上のものばかりで、海に關するものは殆どない。これ即ち、國民の海に關する觀念のないことを證明してゐるのである。之に反して、海外に於ける郵船の寄港地で、廣告其他繪畫等を見ました。英國に於ては、廣告の繪が十枚あれば、其の中必ず海の繪が六七枚あります。これは二度ならず、多年見たのであるから間違はない。これこそ、海國國民の海事思想が、繪に顯はれた現象であります。又國民の海事的智識の鋭敏なことは、驚かざるを得ない。彼の國の學生、又は、一般人民の、船舶を訪問して發する質問にしても、船の各部の名稱を尋ねるなど、凡て要用且つ専門的である。然るに日本にあつては、國民の船に對する着眼點が、裝飾或は食事等、總て陸上のであります。國民の海事に對する思想の濃厚であることは、海事發展の大勢力である。

さて、一旦平和克復して、以前に増して、競争が激甚になつた場合に際して、我國が、果して海上の

勝利を得るや否やは疑問である。諸君は戰後我日本の將來を負うて立たれるのであるから、どこまでも、我國の位置を考へて、どこまでも、海事の後援者たらんことを希望します。

次に、諸君に參考までに、長く私の居ました學校の練習船生活に就いて御話いたします。あの船は二千四百噸で、噸數に於ては、我國唯一の帆船で、神戸の川崎造船所で建造したものです。進水してから、十二年経過したのであります。何故に商船學校の練習船に、帆船を用ゐるかと申しますに、海員の根柢を作る爲であります。それ故、學生は船の掃除は申すに及ばず、便所の掃除に至るまで、水夫同様な生活をして居ます。どんな嚴寒でも、素足で立ち働き、炎天に赤道直下で、石炭の運搬をやつて居る。その有様は、恰も門司長崎の苦力同様、而も不平一つ洩さず、熱心に喜んでやつて居ます。航海は、嘗ては、十六箇月も要したことがありましたが、その長い航海の間には、食物殊に新鮮な野菜の不足をさから、種々の病を起し、爲に死亡するものも出來たのであります。今は、經費の都合をさで、四箇月に句切つてやることに定められました。この様に、海員や當事者は、一意専心、熱心に自分の身命を賭してまでも、我が海事の爲に盡力するのには、翻つて國民の之に對する考を見ますに、前より度々申述べた通り、至つて冷澁であります。然るに古來我國の國民性が、之に適しないかと云ふに、決してそうではありません。遠く、神功皇后は、女性の御身を以て、大軍を率ゐて、朝鮮半島に遠征の軍を送られた事があるが、朝鮮海峽は、元大波流く、潮流激しく、最も危険な海峽ではあるし、之に加ふるに、當時の事として、設備は不十分であり、乗船も現今の如き堂々たるものではなく、其の困難は思ひやられるのに、女性の御身を以て、斯の如き大業を御成就なされた一面に於ては、一般國民の海事思想が、如何

に發達して居たか、證明が出来るのである。之に由つて之を觀れば、我國民には、古來海事思想が、根抵的に、國民の腦裏に存在して居たのである。其の後、或る時代に於て、歴史的な變化を受け、國民が恐怖心を懷き、それが慣性となりて、今日の如き状態に陥つたのである。併し、根本は立派なものであるから、國民が努力さへすれば、美しき海國となる事が出来るのであると思ひます。こゝで、諸君に希望しますことは、將來の我日本の、海運界の後援者は、此處に居らるゝ諸君でありますから、諸君の御奮起を促したいと思ふのであります。それには、今の中學在學中は、私の經驗から申しまして、最も大切な時代であります。目下五箇年の勉強は、將來諸君が社會に出て、活動の基礎となるのでありますから、一旦母校を去つて、社會の人となると、中學時代の學問が、如何に大切であるかを深く感ずる時があります。其の時に至つては、人に不審を聞くも體裁が悪く、其上獨立して事を爲す様になれば、何も自分の頭から割出さねばならず、短刀直入的に、ちよつとの間に、判斷せねばならぬ時があります。この能力と云ふものは、中學時代の間斷なき修養によりて、築き上げられるものでありますから、中學時代は、一つの不審を残さない様にせねばならぬ。同輩に質さうが、先生に聞かうが、決して恥でもなければ、笑ふべきことでもありません。在學中は、必要の學科は一つとして無いのでありますから、一つの疑問をも残さないやうにせられたい。卒業の際は、席次が五十番であらうが、首席であらうが、そんなことには、顧着することなく、胸中不安の無いやうにして、御卒業あらんことを希望します。

啐 啄 同 時 (福原男爵講演要旨)

金子 重 憲 博 筆記
中 村

今校長から紹介のあつた通り、私の家と、防長殊に萩とは、切つても切れぬ關係があるのであります。その土地の學校に來て、私の考の一部を御話するのは、實に愉快であります。

私は、山口中學校山口高等學校を経て、明治三十四年東京帝國大學を卒業しました。中學時代に、一度萩に來ましたが、それ以來二十年後の今日、この堀内に這入つては、實に感慨無量であります。又この學校の前は、私の祖先の居た地で、そこに校長の官舎が建つと聞いては更に深い感を催します。さて、東京に居られる先輩が、防長の教育について、心配して居られるのは、恰も、親の子に對するが如くであります。山口高等學校廢止以來、防長子弟の修學に、不便でありましたが、昨今その再興の議が、新聞に發表されてゐますが、これも先輩達の心配の表はれたものであります。私は前申した通り、防長とは切つても切れぬ關係があるから、將來の防長を有力のものにしたいと云ふ者は、常に念頭にあります。今や岩田君が校長となつて、今後益々刷新せんとして居られます。君は校長としての經驗を四國に於て得られ、且つ實績が擧つて居ます。それが今郷里の學校に歸られ、其の熱誠と、經驗と、愛郷心とに加ふるに、教職員諸君の努力を以てし、尙、校友としての菊屋氏等が援助により、此の學校は、愈々發展の域に向ひつゝあるので、實に諸君は幸福であります。

さて、佛語に啐啄同時といふ事がある、この意味は鶏の雛鳥を孵へすのに、雛鳥が出ようと思つて嘴

で内から殻をすふと、その音を聞いて、外からは親鳥が出してやらうと思つて嘴で殻をかむ、そうして内外相應じて努力して、遂に完全な雛が生れるといふ事でありませぬ。我々が卵をわるやうに、外から壊すばかりでは黄味が出る。内から出よう／＼とばかりしてもでられぬ。それと同様に、親切なる校長始め先輩が、諸君を導いても、下から自分の運命を開拓すべき力が、諸君になれば、完全にはゆきませぬ。諸君は卵の中の雛である。外からつゝく者にばかり頼らず、自分で飛び出やう／＼とする氣がなくてはいかぬ。よく「健全なる精神は健全なる身體に宿る」といひます。又松陰先生が品川子爵等に書いて與へられた、太宰春臺の産語の語に、「不搦糞水、不能成善農。不斷筋脈、不能成善工。不傷肩背、不能成善賈。不踏死地、不能成善士。」と云ふことがありますが健全なる身體があつて、始めてこれ等の事が出来るのであります。だから、先輩も、諸君の健康に就いて心配してゐるのであります。私は健全なる精神があつて、始めて健全なる身體があるのだと思ひます。力士は、身體は健全で、力は非常に強いが、いくら働いても、善農にも善商にもなれません。健全なる精神があつて、始めて身體が健全になるのであります。

精神と身體とは、互に援けるのであるが、基は精神であります。親がいくら殻をつゝいても、子がしつかりして居なくては駄目でありませぬ。そう考へると、萩は諸君が勉強せらるゝに實によい土地と思ひます。これは、私だけの考へではなく、誰もそう思ふ筈であり、又思はねばなりません。大政維新で、萩は防長の策源地として、多くの傑士が生れ、又集りて防長をつくつたのであります。今も校長室で、萩の古蹟の取調をしたものを見たが、維新前後に關係ある土地は五十箇所もある。先づ松陰先生東行先

生を始め、伊藤公、桂公、山縣公の如き、多くの先輩の、深き記念が澤山ある。これ等は、精神を健全にするに最もよい薬であります。昨日松陰神社に参拝しますと、今に先生の御用ゐになつた米搗臼があります。これも精神修養上、大なる効のあるものであります。併し、これも見様によりませぬ。先生は、昔これで米を搗きながら、弟子と勉強された偉い人だといふだけではいけません。その記念物を見たら、大層深く考へねばなりません。今私の考へど、諸君の考へど、一致させることは出来ませんが、今でも諸君が私の考へを聞いて成る程と思つただけでも、益になるでせう。松陰先生のあの記念物を見て、先生を偲ぶだけではないけません。先生の大精神を、あの臼を透して見なければなりません。先生の大精神は、實に防長の大精神であり、且國家的の大精神であります。我々はこの大精神をとつて、將來の基礎を作らねばなりません。昔話に、奈良の大佛の鼻の穴で、博奕をしたといふ事がありますが、それは、大佛の大きな鼻の穴を譬へたのであります。あの大佛を見ても、奈良の大佛は大きなが、形は鎌倉のがよいといふやうではまだ駄目です。あの大きな大佛を作つたのは、あの大佛を透して、佛教の宏大なる眞理を悟らせやうとしたのであります。すべて物は皮相の見方をしてはつまりませぬ。又嘗て大和の法隆寺に参詣しましたが、今より千二百年前の建立にかゝるあの寺に、夢殿といふ建物があります。當時聖徳太子は、困難なる事件が生ずるとこの殿に籠り、獨禪定に入つて、是非の判断をなし、國政を調理せられたといひます。これ等の建築を見ても、あの建方は推古式だとか、大分年月を経たものだからいふ皮相の感を抱くのみではつまりませぬ。之を透して、尊き我國の歴史を見て、その精華を知るのである。そう云ふと、皮相の祖先崇拜主義と思はれるかも知れないが、私の祖先崇拜は、そんな者では

ない。唯祖先を崇拜するのみでは、祖先以上にはなれぬ。子が親のとほりにする様では、親以上の者にはなれぬ。我々は、松陰先生を崇拜するより、その大精神を崇拜すべし。私は、私の祖先が、三百年忠勤を勵んだ精神を崇ぶのであります。法隆寺を見て、聖徳太子を崇拜するより、太子の大精神を崇拜せねばなりません。松陰先生の記念物中に、涙松集といつて、先生の詠歌を四十首ばかり集めたのがあります。その中に、「安藝の國、昔ながらの、山川にはづかしからぬ、益荒雄の旅」又、「伏見より都の方を拜み奉りて」といふ題にて、「見ず知らぬ、昔の人を、戀しやと、おぼさばおぼせ、今もあるもの」と云ふのがあります。これは、先生の心の内に、國家的大精神があるから、それが歌となつて外に表れるのであります。何遍もいひますが、人は精神が一番大事であります。それに就いて、面白い話があります。或る山寺に三人の僧が居りまして、互に申合して、一週間無言の行をすることになりました。さて、三人の者が、本堂に集まつて始めました。そうすると、阿彌陀様にあげてある常夜燈の火が、消えそうになつたり明くなつたりしてゐます。すると一人の僧が、大聲を發して、小僧をよんで叱りました。所が、他の一人が、「無言の行をやつてゐるのに、聲を出すとはどうか」と責めますと、最後の一人が、「自分は一生命にやつてゐるのに、お前等二人でどう／＼約束を破つた」と不平を鳴しました。そこで、無言の行もどう／＼出来なかつたといふ話であります。これなどは、皆の心に隙があるから、こんな事になつたのであります。形だけで、心をしつかり持つて居ないからであります。此の頃の世の中には、心に隙のあるのが澤山あります。撃劍でも、昔の達人同士の試合では、互に打ち合はなくても、心にちよつとでも隙が出来たものが、負けるのであります。心の隙は大小に拘はらず、注意しなければなり

ません。今月の初旬、海軍の艦隊實彈射撃演習がありました。その演習を、毎年兩院の議員が見にゆきますが、その觀覽した一人の話によると、近來の砲術の進歩は、實に驚くべきものがある。十二吋等の大砲八門位は、一人の砲術長の指揮によつて打つのである。砲術長一人で、風の速度など種々調べた上で、各砲の位置をきめる。彼が指揮する通りに、八門の砲は電氣仕掛で、皆一樣の位置を占める。その方向にくると、八つの砲口から同時に煙がでる。そして、始めは距離をきめる爲、目標の前と後に打つて、今度中程を狙ふと、必ず、中る。それまでに十分はかからぬさうである。優勢の大砲を有する方が、勝つにきまつてゐると云つて居ました。即ち假りに獨逸の大砲の着弾有効距離が、一萬米突で、英國のは一萬三千米だとするならば、英國の船は、遠方から／＼打つても中るから、獨逸はどうしても負けることになるのである。それで大砲が六吋から、すん／＼大きくなつて、十二吋だの十六吋だのと、益々大きくなるのは止むを得ませぬ。これは餘談に亘りましたが、その砲術長なども、數學のよく出来る者と云ふよりは、膽の据つた人でなければつまらないさうです。殊に實戰は演習と違ひ、膽が据つてゐなければ、とてもやれませぬ。それで劍道の奥義をさかしたとか、禪機を得たとかして、膽を据えてゐる者がよいさうです。諸君が將來軍人にならうとも、實業家にならうとも、何れの方面に於ても、精神の健實なる者が最後の勝利を得るものであります。而して精神の修養は、今が一番し易い時であります。自分自ら進んでやらねば駄目です。精神修養の基は、何かと云へば、誠心誠意で物事をやるのにあります。一年生は一年生、五年生は五年生と、それ／＼の頭に應じて、誠心誠意にやるのであります。さうすれば、遂には先輩の大事業も繼ぐことが出来ます。明治天皇の御製にも「目に見えぬ、神に

ひかひて、恥ぢざるは、人の心の、誠なりけり」と仰せられ、菅公も「心だに、誠の道に、かなひなば、祈らずとも、神や守らん」と歌つてゐられます。精神が誠でさへあれば、成金の物質的利益は、求めずとも自然に集まります。校長にも話したが、萩は實に交通が不便であります。こゝに工業でも起したら、交通も開け、便利も善くなるだらうと思ふ人もありません。私も、私の専門上、そう思ひさうなものです。却つてそんな感じはしません。世間に精神家の少ない今日、防長の子弟は、精神的充實を謀り、墮落しつゝある社會を革新しなければなりません。萩は、その修養地としては、絶好の土地であるから、益々この長所を利用したい。こう思ふのであります。實に萩は防長教育の中心地として、絶好の土地であります。萩の土地は狭いが、この秀逸な風色の内に、何だか隠微な妙機が含まれてゐるやうです。私は、諸君のこゝに學ばるゝを、非常な幸福と信じ、諸君が益々この地位を利用せられんことを望みます。私は今度萩に来て、實に深い感に打たれました。益々將來諸君の爲に盡さうと思ひます。私のこの前後不順な話でも、記憶に残されたら、參考になることもありません。二三年の後には、また御目に懸つて、御話をする者であります。

萩中學を視て

國のため、うせしたけ雄の、語り草、

とほにしげれよ、まなびのにはに。

懇懇、與三空欲。英雄、雙工夫。空欲、猶容易。殊ニ於ニ懇懇ニ輸ス。

松陰

史料

波賀清太夫

(三月廿四日終業式に於ける岩田校長訓話の一節)

元祿年間、赤穂四十七義士が、主君の讐を報いて自首したので、其の身は、諸大名に預けられることゝなつた。伊豫松山藩も、亦、其の中の幾人かを預つた。所が吉良の親戚に上杉と云ふ雄藩が控へて居る。若も、一つ違へば、此の雄藩が吉良の味方となつて、それが爲に、松山藩は、大兵を受けねばならぬやうに立ち至るかも知れぬ。元祿の時代は平和続きであるのに、かういふ事件が突發したのであるから、よし大兵を引き受けても、之に應じて戦争することが、出来るかどうか、甚だ疑問である。此の時、松山藩に、波賀清太夫と云ふ武士があつた。これは出色の武士で、「如何なる太平の世の中でも、必ず戦争を忘れるな。所謂治に居て亂を忘れずと云ふ心掛で、平素の用意が

肝要である。武器を準備して置いて、いざ鎌倉といふ場合には、いつでも間に合ふ様にせねばならぬ」と云つて、藩主にも、家老にも、建言したので、藩は之を採用して、豫てから其の準備をして居つたのである。故に、義士を預る時でも、堂々と警護して、幕命を辱めない様にしたと云ふことである。油断をすると、いざと云ふ時に狼狽する。松山藩は、此の波賀清太夫の爲に、立派に其の名聲を揚げたのである。

大夫山のしほり

特別會員 安藤紀一

「たどひ身は武蔵の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」と詠みて、安政六年十月二十七日に、江戸刑場の露と消えたまひし吉田松陰先生の墓は、東京府荏原郡世田ヶ谷村大字若林の大夫山にあり。東京よりは、玉川電氣鐵道に乗りて進み、三軒茶屋にて下車し、それより十二町にして、其地に達すべし。昔延寶二年、長藩主毛利綱廣公江

戸在府の時、幕士志村氏の采地内なる農民の地を
購ひて火を避くる處に充てられし處なる故、村民
呼びて大夫山又は長州山といへり。遠くより望め
ば、鬱蒼たる一團の林邱にて、白き華表の立てる
が能く見ゆ。是れ先生を祭れる神社なり。之を松
陰神社と稱ふること、わが萩の松本に於けると同
じ。塋域は、その神社の西隣にあり。社殿と華表
の間は、敷石一條の道の兩側に、御影石の石燈籠
十數基整然として列り、各々寄進者の爵位氏名を
刻す。皆山口縣出身の諸公なり。境内に藝備協會
奉獻の高野榎、肥後學生奉獻の銀杏あり。周圍は
松杉森森。誠に清幽神秀の區なり。さて、塋域の
門には一小華衣あり。右側に、「大政一斷之敵」、
左側に、「木戸大江孝元」と刻せり。入ること四五
間にして、同形の墓表六基の、石欄内に列せるを
見るべし。右より數へて第一は頼三樹三郎、第二
は小林民部少輔、第三即ち中央は松陰先生の墓に
て、吉田寅次郎藤原矩方と刻記せり。第四は米原
良藏、第五は福原乙之進、第六は綿貫次郎助なり。
前の五つは、一列にて同方面に向ひたれども、綿

貫氏のは列外に出で、横向なり。しかして、頼
氏の墓の側に、一碑の横向なるが、中谷正亮を始
として四十餘名を刻したるあり。又石欄外の右側
に長藩第四大隊戦死者招魂碑と題したる一碑あ
り。裏面に、故桂公の撰文と、戦死者四十一名を
刻せり。其他墓道の右に中谷正亮の墓、左に來原
良藏の妻春子の墓、野村靖夫妻の墓あり。總て是
れ勤王史中の人、吾曹山口縣人の最尊敬すべきも
のなり。史を按ずるに、頼三樹は頼山陽の三男に
て、勅王の志篤く、水戸藩士と交り攘夷密勅の内
議に與りたるに因り、安政五年幕府に捕へられ、
翌年十月七日死刑に處せられたるもの、小林民部
は鷹司家の臣にて、亦尊王の志篤き人なりしが、
捕へられて流刑と決し、配處に赴かざる前に、安
政六年十一月十九日江戸獄中に病死したるなり。
來原は舊長藩八組の士、文武に達せる嚴正の人な
るが、藩の方針を誤解せし責を引きて、文久二年
八月二十九日、江戸櫻田の藩邸に自殺し、福原も
長藩八組の士にして、氣槩あり。文久三年十一月
二十五日江戸の脇坂又三の家にて幕吏に圍まれ、

戦ひ傷きて自殺せり。綿貫は長藩の足輕にて、江
戸藩邸に勤務せしが、元治元年七月京都の變起る
と共に、二十六日江戸藩邸沒収となれる時、幕吏
其帶刀を奪はんとせしを、之に抗して遂に自殺せ
り。しかして、松陰先生は、安政六年十月十六日以
來、己に死の免れざるを知り、後事を飯田正泊尾
寺新之允に托したりしが、二十六日、二人は、明
日先生の斷獄あるべきことを聞き、翌日傳馬町獄
卒に面し、その既に死刑に處せられたるを知り、
痛恨措かず、因て金を與へて、遺骸下付の事を托
し、二十九日、幕吏の許諾を得、桂小五郎（木戸
孝允公）伊藤利輔（博文公）に告げ、小塚原回向院
に運びたる遺骸を受取りたり。其遺骸は四斗桶に
入れてあり、開きて見れば、顔色生けるが如く、
髪亂れて面に血流れ、體に寸衣なし。四人一見憤
恨に禁へず、飯田髪を束ね桂寺尾血を洗ひ且桂の
幡祥、飯田の下着を着せ、伊藤の帶を之に結び、
首を其上に置きて甕に収め、其地に埋葬し、數日
の後、墓表を建てたり。然るに、幕府令を下して
院内志士の墓碑を毀たしむるに及び、先生の墓石

も亦撤せられたりしが、四年の後即ち文久二年
に、戊午以來國事に罪を得たる士を釋し罪名を削
るべしとの勅旨ありたれば、長藩久坂義助、更に
碑を其處に建つ。然るに小塚原は穢汚の地なれば
とて、改葬の議起り、藩府の許を得てこの大夫山
に改葬すること、なし。文久三年正月五日、高杉
晋作伊藤利輔山尾庸三白井小助赤根武人等、小塚
原なる松陰先生及び頼小林の二士の三墳を掘り、
遺骨を新棺に歛め、門人故舊、柩に従ひ、儀禮嚴
肅、高杉先驅となつて、大夫山に向ふ。上野三枚
橋に守吏を叱して過ぎしは、是時の事なり。是よ
り先、頼三樹の刑に遭ふや、大橋訥庵、その墓を
立てしが、訥庵罪を得るに及びて、頼の墓亦毀た
る。是に至りて、長人の収むる所となれり。かく
て、大夫山改葬の事終れるは、其日の黄昏なり。
其後數日、高杉等、また芝の青松寺なる來原の墓
を、此處に移し、其十一月、長藩士笠原半九郎も、
友人福原乙之進の屍を、傳馬町獄にて請ひ求め、
此處に葬れり。然るに、元治元年七月京師の變に
幕府は江戸の長藩邸を侵し、且つ火を大夫山に放

ちて、五人の墳を毀つ。されど海内騷擾の際、修復の擧もなかりしが、明治元年十一月木戸孝允藩命を受けて、新に松陰先生以下の五墓表を建て、且つ、彼の綿貫治郎助の墓を移し、文久二年江戸に病死せし長藩士中谷正亮及び江戸長藩邸没収の時難に殉せし四十五人の招魂碑を建つ。是れ現今石欄内に在るもの、建設顛末の大要なり。しかし、松陰神社は、明治十五年毛利公以下門人舊故の相謀りて建設する所にして、落成は其十一月二十日なり。以上述ぶる如く、この大夫山は、勤王史特に我山口縣の史實に關係深き處なれば、松陰先生の高躅を景慕し、勤王諸先輩の芳蹟を尋ねて、國士の氣概を養ふものは、須らく、時々、衣上の紅塵を掃うて此に參拜憑弔すべきなり。况んや、我が萩中學校出身者にして笈を負ひて東京に遊ぶ人に於てをや。因に記す、この塋域の西南に、廣澤真臣桂太監二公の墓あり。更に西に進めば、玉木正之氏の邸内に、乃木大將の神祠あり。參拜すべし。

乃木將軍の書翰

左に記す所の者は、故乃木將軍の物せられし珍らしき書翰にして、其の眞筆は、樺郷東分村竹中常吉氏の所藏に係る。今回、氏より其眞筆を、本校に寄贈せられたれば、ここに掲げて、將軍追慕の資料に供す。

編輯子

新年の御慶目出度申納候然は久々御無音に打過候處實は彈丸と人命と時日の多數を消費しつ、埒明き不申候爲め苦悶慚愧の外無之漸く須將軍も根氣負けの氣味にて開城致し呉れ當方面の一段落を得候無智無策の腕力戦は上に對し下に對し今更ながら恐縮千萬に候愚忌戰死の際は特に御懇情被下候由多謝の至に御座候御禮申上候恐々敬具

三十八年一月四日

希典拜

齋藤盟兄

閣下

(備考) 齋藤盟兄とあるは當時の海軍大臣齋藤實氏を云ふ

通信

江木貴族院議員の書信

拜啓。春寒料峭之候、愈々御勇健之段、欣慰々々。さてこのほどは、校友會雜誌第十五號、御送付被下鳴謝に不堪。早速一讀致候處、老生講演筆記中、「松陰先生の五十年祭は、乃木將軍、野村子爵及私の三人で舉行したのである」と有之候得共、此三人は最初の發起人であつて、結局五十年祭は、毛利家の費用を以て、毛利公御主催の下に行はれ、老生等も其委員を命ぜらるゝことに、相成たる次第に候間、此邊之意味相違せざる様いたし度、就ては、次號なりとも、鳥渡御訂正置被下度相願候。先は御禮旁右願用迄如斯に御座候。勿々不悉

大正六年三月廿七日

江木千之

萩中學校校友會幹事御中

士官學校だより

拜啓仕り候。朝夕は、大分涼氣を覺え申候處、萩は如何に御座候や。私ども歸省の節は、種々御配慮にあづかり、誠に有り難く存じ奉り候。私ども、去る三日朝、なつかしき萩地を出發、五日無事歸校仕り候。早速愚翰差出し申べきはずに候處、九日より銚子方面へ、現地戰術、及游泳に參るため、少々多忙にて、且は、づべらのため失禮申候。十日より十日間、九十九里濱及犬吠岬附近にて午前現地戰術にて、この酷暑を顧みず、山野を馳驅致し、午後は、渺茫限りなき太平洋の怒濤と闘ひ、大いに、心身を鍛鍊仕り、去る十八日、歸校致候。今日は、僅に暇を得候間、亂筆ながら御伺申上候。

さて、當校日課時限表は、私寫取の分を差上申候。其他、當校の豫定表としては、學科日割表とて、(一年半を三期に分け、前・中・後期とす。)各期の各日に、學科を配當したるもの(區隊長殿に請求して直に送る者に御座候)これあり候。これ

により、何月の何日には、何があるといふことを定め、尙、術科を適當に配當して、其の日の日課表を作り出し居り候。凡そ、一週間には、如何なることをするかを、或一週間の時間割を例として、御知らせ申候。

月	交通學	兵器學	馬術	語學	教練
火	戰術學	交通學	體操	語學	教練
水	馬術	軍制學	操典	訓話(中學の修身)	
木	戰術學	衛生學	劍術	語學	教練
金	兵器學	交通學	馬術	語學	教練
土	野外教練(中隊戰闘中隊攻撃)				
日	被服、靴清潔検査				

右の如く、語學はなかく重要視せられ候。此の外學科としては、地形、服務提要、各兵科操典、要務令、築城學、諸教範等種々これあり候。各學科は一時間半にて、この頃は、少し眠氣がさし候。教練は、普通は、一週二度位にて、この頃は、午後休に御座候間、教練をやるだけのことに候。

次に毎日行ふ事を概略申上候。(日課時限表の通) 嘯唳たる起床喇叭に、寢具跳ね返して、廊下に整列し、點呼(目的、人員検査と朝の挨拶)を受け、

それより寢具を整頓して、便所に行き、洗面をすませ、武器の手入をし、自習室に行く。此間僅に十五分を出です。自習を一二分間すると、運動場に整列、朝の運動を、十分乃至十五分間行ひ、空腹を抱へて、又自習に行き、一刻千秋の思にて、朝食喇叭を待ち候。喇叭の鳴る前、校庭に整列、喇叭と同時に食堂に引率せられ、其前にて解散し、週番士官の箸を取るを晚しと食ひつき申候。食事終つて、食堂前に整列、又歩調を取つて、自習室前に來りて解散直に自習(休憩なれど、競争烈しき爲一分一秒にてもこつこつやり居り候)六時半學科。校庭に整列、隊伍堂々として、講堂に參り込み申候。第三時間目は術科にて、馬術などは、實に威勢よく、喇叭前に腕に走つて行くやうに致し居り候。此の節は、午後は學科はなく、教練ばかりに候へども、普通は四時まで學科これあり、それより休憩にて、この間は、自習室で勉強しやうとすれば、週番士官が叱り申候。皆運動場にて、自分の好む運動を致し居り候。中學時代と異り、上官は、寧ろ、勉強するな的にて、成績も

何も一寸も申さず候。それは發表すると、競争が益々激烈と相成る故に候。五時より六時まで自習、六時夕食、夕食後一時間休憩にて、號令調聲や、同郷の友と相寄り集り、快談を交へ申候。異郷殊に乾燥に流れ易き軍隊の中にて、同窓の友と語る程うれしきものはこれなく候。二十八期生までは、萩中出身者十名位居り、頗る優勢なり由。

今頃は、僅か四名、今年の十二月より一名來る位にて、實に心細く感じ居り候、七時より自習、九時二十分までは、間に休憩これあり候へども、ぶつ續けに自習を致し居り候。此の間に入浴あり。入浴は、士官校三大樂の一にて、他は寢ること、食ふことに御座候、如何に簡單なるかが、推察せられ申候。書翰は、九時二十分配達せられ、皆已の名を呼ばれるを長くして待ち居り候。九時三十分點呼。十時消燈。この三十分間自習の殘を急ぎ見る者もあり、眠氣堪へ難くして寢臺に飛び上る者もあり候へども、十時を報ずると同時に、火はふつと消え申候、勉強家は、尙は、便所にて、線香の明にて、一字づつ、讀書するものもある由に

御座候。寢臺に入りては、明月冷く窓を透して顔を照す宵などは、三十分も一時間も眠れず、故郷を慕ひ、過去將來を思ひ更り申候も、常は、一日の激動に疲れて、直に熟眠いたし候。

以上は、五六月頃の生活状態にて、此頃の時間割は、少し相違する所これあり候。然し行事の順序は、略同様に御座候。先は、生活の概略を申上候までにて、此書認め候にも、三日か、りにて、實に亂筆意味不明瞭の点多く、失禮千萬に御座候へども、何卒其の邊御海容下されたく祈り奉り候。時候柄、折角御自愛專一に願上候。敬具。

八月二十五日

河野匡四郎

岩田先生 函大

追て、學校生活、及現地戰術、游泳の繪葉書を發送仕るべく候間、生徒にも御見せ下され候は、幸甚と存じ奉り候。

山口高商より

拜啓。炎熱尙は去り難く御座候へども、谷川の水、木の葉の蔭にも、隠し難き秋の色の見え初めて、青年活動の好時節も、追々近づき申候。折柄、校長先生には、愈々御壯健の段、大慶至極に存じ奉り候。降て私事も、日々恙なく通學罷在り候間、他事ながら、御放念下されたく候。夏期休業中、御伺仕るべきはすの處、家業の手傳に追はれ、御無沙汰仕り候段、悪しからず御海容下されたく願上候。私ども、當校入學以來、常に母校に對し恥づる所なき様、勉め居り候のみならず、卒業後も、大いに、實業界に立ちて、天晴秋中出身の名を輝かさんことを期し居り候。思ふに、人の備となりて満足するものはいざ知らず、苟も、活社會に飛び出して、大いに活躍せんと欲する者は、死せる學問のみにては、到底物の役に立ち申さず、學術の講究と共に、實地の研究が、肝要なること、信じ、夏季休業後手を利用して、下の關の一商店に、商業見習者として、店員と生活を共にし、私ども

の密に囑望せる、滿洲・南支・南洋方面の輸出品の取扱を研究し、今の處では、荷造位は、殆ど不都合なく出来る様に相成甲候。尙、船荷證券・爲替手形・税關に關する事項など、主として研究致したき事、多々これあり候へども、日數僅少にして、遺憾ながら後日の休暇を約して、歸舍致し候。目下學期試験も、一箇月の目前に迫り候へば、益々奮勵して、人後に落ちざらんことを期し居り申候。先は御見舞旁近況御報知まで斯の如くに御座候。

頓首。

大正六年九月七日

長嶺元二郎

岩田博藏様

侍史

夷吾嬰^ニ囚繫^ニ、
天意或有^レ在^リ。
膠鬲學^ニ魚鹽^ニ、
拂亂亦何^レ嫌^ニ。
松陰

文苑

【和歌】

萩町所感 (福原男爵玉詠)

秋雨は、ふれごそそげど、御社の、池のおもだか、色もかはらす。
たなはる、城の石垣、荒れ果て、まつはる葛の、こゝろかなしも。
川添の、御館はあれて、夕潮の、はやきながれを、秋風わたる。
なにがしの、館のあたり、草むして、厩の跡に、くつはむし鳴く。
ひさし野の、空まで雲は、つらくらん、秋雨ろ、ぐ、松陰神社。
暖かき、南の園の、露をうけて、雄々しく咲けよ、大和なでし子。
武士を、打ちししもこの、ねと絶えて、野山のひどや、晝も虫鳴く。

ぬかうけば、ただ古の、戀しくて、代代の御墓に、秋雨ろそど。
益荒男の、涙松集、ひもどきて、ろの世を忍ばむ、秋雨の宿。

長州青年に 第五學年 原田信治

明治維新の際、未だ若冠にして、國事に奔走し、上御一人の宸襟を安し奉り、國家を泰山の安きに置き、下萬民塗炭の苦を助け、腰に帶ぶる大刀を撫して、天下國家を論じたりし長州青年の意氣に想到せよ。一代の傑士松陰先生の門下に養成せられたりし、當時の偉物は多く長州青年にあらずや。今時の獨國の如く、防長二州を焦土に化せしむとも、敢て屈せじとの意氣もて、天下諸侯の大兵を國境に一蹴し去りし、當時の元氣、如何に盛なりしか。語に言はずや、「ローマは一日にしてならず」と。吾人敢て吾が長州が斯の如き、繁榮をなしたりといふにあらず。この一州の生める青年の氣骨、一日にしてよくなれりといふか。徳川登臣の關ヶ原合戦に、故君に奉ずる誠忠に、あたら中國十餘州を放棄して、以來三百年、國主も下臣も一日も早く、徳川幕府に重なる怨恨を解いんことを、圖りしにあらずや。古老余に語るらく、「長防の傑士は一に幕府衰亡の機を伺ひ居れり。これ關ヶ原合戦に依てなれる怨恨の賜物なり。かの時若し我が君、徳川

に與して、國泰平ならんか、豈よく維新の大業を賛成して、天下諸侯を覺醒するを得んや。嗚呼、我が君及び下臣は、よく憂を幸に變じ得たり」と。余此の言を聞きて、撫然として、慚顔自ら赤きを覺わたり。長州青年諸君、吾人不學の身を以て、よく大方諸兄に、意見を吐露する資格あるにあらず。只武侯精神、國家を思ふ熱心に至りては、今暫らく權門富豪の下風に立たず。諸兄、希くば吾が誠意ある絶叫を聞かれんことを。噫、頑廢せんとしつゝある長州よ。吾人は過去に於て、長州人といふを、如何に心強く感じたるが。身を鴻毛の輕きに比して、布衣にして、よく總理大臣の印を帯びし者少からず。陸に海に、軍國に覇を唱へたる、長州の榮達も、一時の夢なりしか。今や漸く他國に壓せられんとする長州の前途や如何に。吾が長州のかの勢力は、一日してなりしにあらず。而してその後輩たる、我等青年が奮起せしんば、吾人はローマを衰滅せしめたる國民と同罪なり。余輩は毛唐人に比較せらるゝを好まず。况やかゝることにてなや。戰勝の國民は、稍もすれば榮華に耽り、輕き浮華に流れんとす。現に我が國も亦、その類を免れず。借問す。現下の長州青年に、昔時天下三軍を一蹴せし、元氣ありや、否や。吾人は此等先輩祖先の氣を呼吸し得べく、血の流を汲むべき天地にあるにあらずや。然るに世俗と共に浮華に流る。豈いづくにか、かゝる昔日の元氣あらんや。あらば何が故に、此の目に見ゆるが如き、危険なる大敵を國外に、放逐せざる。往時の大敵は縱令、我が青年破るとも、僅に防長二ヶ國の滅亡ならんのみ。然れども當度の大敵は、實に由緒ある神國をば、亡ぼさんとするを思はざるか。何の目的もなく、徒

らに山紫水曄の地を捨て、都會に走り悪友に交りて、身を亡ぼす。これ等は寧ろ故郷に止りて、長閑に空高く春の鶯雀を聞き、白熱の下馬をひきて、活動するに及ばざること數等なり。しかるに實實剛堅なるべき、農家の青年も稻田の陰に於て、淫歌を唱へ、或は秋の夜長にも、三三五五相集ひて、淫話を語り得たり。斯の如き青年に背負はるゝ長州の前途は、危険なりといはざるを得ず。吾人は悉く松陰門下の弟子たり。故にかの主旨を奉體し、その士氣を鼓舞すべき七則を高唱して、頑健なる身体、強き意志を作りて、一州の狭きより、一天下の大を張興すべきなり。我等青年にして、よくしからざれば、何の願あつて生きて、先輩に見え、死して地下に、護國の鬼に仕ふるを得ん。徒らに過去の諸傑をして泣かしむるは、吾人のとらざる所なり。思ひ起す。幼時より人を泣かしむるは罪なることを、幾度か云ひ聞かせられしを。振ひ起て、長州の青年。長州は衰退しつゝあり。吾人は幸福を變せんとするか。

野心小論

第五學年 鈴木正夫

『Boy, be Ambitious!』千古不磨なる斯言は、青春の血胸に高鳴る青年が愛誦して措かず、且世界史上に不滅の名を銘せる偉大なる靈魂が、異口同音に、強く、鋭く、彼等の耳に囁く言なり。英傑が異國の絶倫にして、無比なるに驚く時、斯言を聴けば、誰か希望に奮める已が後生を望みて、骨肉を離脱せしめざる者あら

んや。野心を抱く若き男の兒よ。天地をも貫ぬく、熱烈なる野心を藏しながらも、異國中にして驚るゝ刹那、吐血の思にて叫ぶ悲壯なる律の前者に比して、如何に潔身的にして、熱血的なるか。キリストが身外に溢るゝ強烈なる、信仰を奉じて、十字架の上に斃れたる、秀吉が征清の師の劈頭に於て、逝去せる、共に己が後繼者に吐ける斯言こそ、正にそれなり。秀吉憚むべし。キリスト惜しむべし。されど其異圖一に功を奏せず、徒に、無爲空論の徒として、葬らるゝ士の吐く斯言こそ、更に悲、更に壯ならずや。榮の庵より洩るゝ詩吟一聲、聲や錆びたりと雖も、力や失せたりと雖も、その高低強弱坐にありし昔を偲ばしむるものあり。「風蕭々、易木寒、餘韻纏綿、天是に配するに月夜を以てす。嗚呼、四面楚歌の聲を忘れて、不遇多恨の士が、この真夜に暗く心事に想倒せば、否、更に、彼が聲に驚く、無心の愛兒を抱き、聲慄せて、斯言を叫ぶ光景は！實に是悲の極、壯の極ならずや。『Boy, be Ambitious!』是最後の叫びなり。斯言は、かくの如く、悲壯なりといへ、そのヒーローは、白髮老骨の士が、萬事休交の不運兒か、或は將に世を辭せんとする熱血兒なるべし。捲土重來、七轉八起は言はずもがな、遂に、斃而後己の際涯に處して、從容と吐く斯言こそ、光あり、輝あり。有名の英傑と、無名の人士とは、蓋し、五十歩百歩の差のみならんか。共に其努力奮闘に對して、快く眠らんか。されど、前者は堂に上り室に入り、以てその勇名を誦はれたり。如何せん、後者の堂に上らざるを。壁に

入らざるを。然れども、幕末勤王の士の英志は、凝つて三百年の堅壁を抜けり。松門の諸豪は、起つて幾多の風雲兒と化したなり。成吉思汗の遺兒の、能く歐亞を席卷せる、キリストの遺教の盛に、發展せる、何れとして、斯言の精華ならざるはなし。伊藤公のハルビンに斃れたる、果して何者を暗示するぞ。帝國多事の秋、斯言に蓄積されたる、熱烈なる意志と精力とは必ず繼承し、以て祖國の爲に奮闘せざるべからず。功業ならずして、空しく斃れ、『Boy, be Ambitious!』を叫ぶも可なり。唯唯、『Boy, be Ambitious!』は、永久なる大波動となりて、野心に燃ゆる若者が胸へ、胸へと傳はり行きて、天地と共に、止む所を知らざるなり。

繼續的決心

第四學年 松浦孝義

凡そ、人たるもの、一事業を爲さんと欲せば、決心を第一要義とせざるべからず。人はこの決心あるにより、何事をも爲すことを得るなり。若し此決心なからんか。進歩なく、競争なく、所謂生くるも猶死せるが如くならん。大古、遊牧の民が、此處に三日、彼處に二日と、漂泊せし時代は知らず。今日の如き、生存競争の劇烈なる世に於ては、決心なき人は、社會の劣敗者として、他人の下風に立たざるを得ざるなり。抑決心の價值は、其の繼續的なるにあり。家康はいはすや。「忘ら

す、行かば千里の、外も見む。牛の歩みの、よし遅くとも。」と、一旦決心せし上は、假令、其の進歩は遅々たりとも、倦まず、挽ますんば、遂には目的の彼岸に達することを得べし。偉大なる手腕技術を有し、所謂學は天人を貫き、才は文武を兼ねる人にて、往々成功せざるものあるは、畢竟其の決心の一時的なればなり。彼のコロンブスを見よ。雙眼鏡を手にして、船首に立てる彼は、海を航すること數十日。目に入るものは、只渺々たる海原のみ、時に颶風と戦ひ、時に怒れる船員を撫じ、あらゆる萬難を冒して、遂に新大陸を發見せしにあらすや。彼にして、若し、中途、事を懸せば、如何。恐らくは、光輝ある青史の、一行だに、飾ること能はざりしならん。獨りコロンブスに止らず。古來名を竹帛に垂れし英傑は、皆最初の決心を繼續せし者なり。實に決心の繼續は、月桂冠を得る最好手段なり。然れども、之れ易々たるものにあらずなり。例へば、日に一回書く日記さへ、之を物せんと思ひ定めてより、一年、二年と繼續する者少し、况んや、十年、二十年、乃至一生を通じて、繼續するもの幾人がある。決心の繼續は必要なり、而して又困難なり。獨り凡人のみならず。彼の鎌倉時代の大人物、最明寺時頼さへ、幾度か、思ひ定めて、變るらん。頼むまじきは、我心たり。」と、詠めるにはあらすや。然らばとて、徒に、決心の繼續の難きを歎くは、愚なり。我等青年は人生の春にして、勢力の旺盛なる時なり。事業に對する決心は、確乎たらざるべからず。不撓不屈、斃れて已むの精神を以て、事に當り、決心と實行と兩々相俟ちて、目的に進むべきなり。然るときは、何ぞ決心の繼續せざる理あらんや。

勇氣を涵養する法

第四學年 久保 諭 一

偉人勇士たらんと欲する者は、須く勇氣を涵養すべし。世人往々、勇氣の意味を誤解して、自己の腕力を恃み、人と争を好み、前後を考へず、傍若無人の振舞を、敢てする者を、勇者となすものゝ如し。然れども、かゝる輩は、眞の勇者にあらずして、徒らに勇氣あるものゝ如く粧ひて、己の卑怯を飾らんとする者なり。されば、孔子も、赤手を以て虎を搏ち、舟なくして河を渉るが如き、無謀のことを敢てするものは、眞の勇者にあらず、事に臨んで慎み懼れ、謀を好んで、萬事巧みに處理する者こそ、眞の勇者なれ。と、その弟子子路を誨めたり。然れば、眞の勇氣を養ふには如何にすべきか。思ふに、此の精神を養はんとする者は、須く其の源泉を涵養すべし。第一、勇氣の源泉は健康にあり。勇者は健康の人に多く、怯者は羸弱の人に多し。然れども、病弱の人必しも怯者にあらず。これ、猶、他にも勇氣の源泉あればなり。第二、勇氣の源泉は智にあり。病弱の學者にして、往々勇氣に富める者あり。智者必しも勇者ならん。眞の勇者は、又智者たらざるべからず。智識透徹し、事理に明かなるより生ずる勇氣は、尙ぶべきものにして、かの學者高僧の沈勇あるは、即ちこれなり。第三、勇氣の源泉は徳にあり。智は眞勇の一源泉なることは、前に説けるが如し。然れども、徳の伴はざるは眞智にあらず。従つ

て、之より出づる勇氣も、眞勇にあらずなり。されば、眞勇の源泉として、最も重すべきは、徳なりといはざるべからず。徳ある者は、其の心公明正大にして、毫も後暗き所無きが故に、氣の痿ゆることなく、義に向ひては、勇氣奮勃として躍動するを覺はん。されば、人若し、よく以上の三源泉を涵養せば、眞の勇氣は深々として湧き出で、終生絶ゆることなかるべし。勉めざるべけんや。

偶 作

第三學年 阿部 芳甫

糸瓜

今年何處よりか、求めし糸瓜の種を、何氣なく垣根に種を置きしに、五月雨後淡緑の芽を吹きて糸瓜の二三生じ居たり。それよりは一入手入れして育つるに、丈は見る／＼伸び今は垣一面を綠葉もて蔽ひぬ。深く切れ込みたる葉の込合ひて、日影をも通さざる中に、黄色の花の浮き出でたるが、疾める津に映する時、そこに一種の慰安と興味とを與ふ。花は胡瓜の花を更に太くしたるが如し。早や一寸ばかりの糸瓜の付きたるもあり。初秋の美觀も思ひやられて、此頃は朝夕行きて景氣よき様を見るを、一つの樂しみとせり。

蟬の聲

我等の夏をして最も夏らしく感ぜしむる物は蟬なり。朝まだき梧

桐の蔭に鳴き出づる蟬の聲に、吾人は早や釜中の人となれるを知り、夕遠近の森に鳴く日暮しの聲々に、吾人は再び樂しき夕靄中に入りたるを知る。三伏の眞晝靜かに窓によれば、彼の焼け付くが如き聲を聴かざる所なし。これ夏は蟬の昆蟲界に於ける覇權を握るべき時なればなり。彼の蟬聲を以て徒らに騒聲となす者、これ即ち夏に敗れたる徒にして、一種の怠惰漢なるべし。夏に缺くべからざる景物は蟬なりといはん。

切 木

我が家の庭前に三本の體木あり。三本とも綠葉よく繁りて、鬱陶しければ、真中の一本なりとも切れば少しは風通しも好くなるべしと思ひ、一日之を切斷せんとし、先づ大なる枝より切り初めぬ。露は餘り就利ならざる上、盛夏の暑熱は、我をして倦ましめずんば止まず。四本の枝を切斷するに、約一時間を要し汗は全身に水を浴せかけたる如くなり、暑きこと限りなし。これにて一大障害物は、僅に其の殘骸をとどめて除去せられ、雲走り鳥翔る宇宙の景を擅にするを得たり。されどこの木は、亡き祖母上の我等の爲にとて、植付けられし物なり。無謀にも切斷しつるかなと、恰も一大罪惡を犯したるが如き不安の念に驅られぬ。再びその切口に倒れたる枝を付けたき心地すれどせんすべし。

朋友と知己

第三學年 弘 達 一

朋友とは何ぞ、知己とは何ぞ。世には、朋友を知れども知己を知

らざるものあり。又知己を知れども朋友を知らざるものあり。昔は、朋友五倫の内であり。故に、士君子の朋友を避ふる事、甚だ厚く、其交際の如きも決して之を等閑に附せざりしなり。有朋自遠方來、不亦樂乎。とは孔子の言なり。而れども今や海陸交通の便大いに發達し朋友遠方より來るも別珍樂しからざることあり。是れ其交際頻繁なるが故なり。從て知面の士甚だ多く、眞友轉た乏し。朋友とは生涯を經過する同行者たるなり。而して眞の朋友と云ふべき者は、即ち人として人道を踐み一代を經過する同行者是なり。若し夫れ此の朋友ならんか。漢々たる遠路獨行せざる可からず。一人にても朋友を有せば孤影蕭然山中に獨り居れども、敢て淋しきを覺ゆる可し。而らば如何して朋友は出で來るや。朋友の出で來るや實は事情の同一なるにあり。農夫は農夫と朋友たり、酒客は酒客と朋友たり、或は嗜好上に於て、或は職業上に於て又は經歷、性質、位置、等皆其の等しき点に於て朋友たるを得べし。然れども其の同一なる点除かれんか、其の情趣薄らざるを得ず。然らば眞正の朋友とは如何なるものなりや。知己とは如何なるものなりや。人多く假面を蒙る。その善く假面を透して己を知るものは之れ知己に外ならず。人既に己を知る何ぞ假面を蒙るの必要あらんや。故に知己に對しては殆んど己自ら己と對するが如し。茲に於て始めて自他の眞價爛漫として發揮せらる可し。

善友と交れ

第二學年 厚東誠七郎

「蓬麻中に生すれば助けずして自ら直し」とかや。誠に其言の如く、麻中の蓬は助けずとも直かるべし。然るに、茫々たる平野、或は路傍の蓬は如何に。灌木其他の雜草のために壓せられ、或は、道行く人車の爲に踏みつけられて、生長すること能はず。遂には、路傍に枯死するの例さへ少からず。之を人生に譬ふれば、宛も草木の發芽時、即ち人生の春とも稱すべき少年青年の時機に於て、惡友と交り、法律上の罪惡を犯し、或は、放蕩安逸に流れ、世間より爪弾きせられ、不過の中に一生を過すが如けん。世には、動しすれば、此の路傍の蓬の如き輩なきに非ず。かゝる者は、社會の一個人として、此の世に生れ出でたる價値なく、唯天下の穀潰しとして生れたるのみにて、實に社會を掻き亂す罪人なり。されば、

「水は器に隨ひて其様々に成りぬなり。人は交る友により善きに惡しきに移るなり。己に優る善き友を撰び求めて諸共に心の胸に鞭ちて學びの道に進めかし」

とよませられたるにあらずや。此の御歌に對し奉りても、人豈路傍の蓬の如くにて可ならんや。必ずや、麻中の蓬の如く、善友を撰びて惡友を避け、且つ、「一日在レ世一日有レ爲」の金言を確守し、以て各人が確固たる目的に向つて進み、立身出世せざるべからず。一日、余は、吾父の所有せる山に行きて見るに、此の山の太なる竹、殆ど全部採伐せられたり。而して、嘗て其間に在りて

海

第二學年 山縣政

海、海、あゝ慕はしく懐かしき海や。海は勇壯なり。又變化の妙に富めり。怒濤岩に激して、雪と散り玉と飛ぶ處、此の勇壯なる景に對して、誰か恍惚たらざらん。その轟々として萬古に變らざる波の音、これぞ我等海國男子の叫び聲ならん。のたりのたりと打寄する男波女波のいと長閑なる春の海、海水浴に波間涼しき夏の海、或は清澄なる秋の海、又は悲愴せる冬の海、何れも深き趣あり。變化の妙に富めり。試に、蒸暑くして堪へ難き夏の日、風蕪る磯松の下に至れ、紅塵萬丈の中は、髪を跳めし眼は、一轉して水平線上の帆を數ふるに至り、オゾンに富みたる海風の呼吸は、胸廓の一入擴大せるかを疑はしめ、胸襟自ら爽快なるを覺ゆ。見渡す限り渺々として、無涯の線を湛へたる空、茫々として、際限無き海中に、大島小島の、或は遠く又近く、碧盤上に點々たる景、翠巒皆松の白砂と相映じたる美、到底筆舌の盡し得べきにあらず。而も海は一度怒りては、濤起りて岩を噛み、萬噸の船も狂瀾の前には一片の木の葉の如し。あたかも、一面に嬰兒を懷かしむる英雄の、一面に三軍を叱咤するが如し。かの鹽を取る海水、海底に飾られたる藻類、又はこれ等を家とする魚類等は、何れも無盡の寶なり。げに心地よきかな海や。壯大なるかな波の音や。我等海國男子たる者、將來はその海を家となし、その波を枕となす心掛なかるべからず。げに此の海こそ、我等が活動すべき大舞臺なれ。

僕の好む色

第一學年 黒川克彦

僕は紅色が好きだ。

日が入る時、西の空が燃ゆる立つ様に、紅色にかはつた時が最も好きだ。

嗚呼あの美しき様、華やかな様、よく話で聞く天國へ行つた様な心地がする。

いかなる名畫家でも、あの美觀を、畫に現すことは難からう。

朝日がさして、竹の影が障子へうつつて居る所などは言ふに言はれない。

丁度、紅色の紙へ竹の畫を描いた様だ。

我が國の國旗が白地に紅色で眞圓くそめてある事、夕やけの時の麗しき事等、何と言つても僕は紅色が好きだ。

元氣

第一學年 高田良雄

大木と豈も河に投ぜらるれば、波の間に／＼に流れ行く。即ち生

命が無いからである。之に反して粘の如きは小身にして、よく急流を遡る。これ即ち生命があり元氣があるからである。必ずしも大なるものは小なるものに勝たぬ。唯元氣の如何による。我が國が彼の雄の大國をひしぐ事を得たのも元氣の外なく、所謂大和魂があつたからである。此の如く、元氣なきものは、到底成功の彼

岸に達するを得ぬは勿論、如何なる小事をも成し遂ぐることは出來ぬ。困難に打ち勝ち、目的に猛進し得るも、皆己が元氣に基くのである。然れば、吾等は此の夏季休暇中には、須らく山海に身體を練り、元氣を養ふべきである。

圓天上爲_レ蓋_ヲ。

方地下爲_レ輿_ヲ。

俯仰不_レ踟躕_セ。

即_チ是_レ君子_ノ居_。

松陰

英文欄

GET UP EARLY.

By Meizo Tanaka, V. A.

It was a summer morning. I happened to open the window, rubbing my sleepy eyes, and saw the sight of dawn. Then suddenly this view of dawn aroused in me a strong desire to make a trip, and I thought how happy I should be when I climbed the mountain named Mt. Hinomi over there, being enticed out doors by the delightful scene in the east.

With one of my friends I got up the mountain, and had spent a few minutes in ascending it, when I could see in all directions.

The haze apread all over the surrounding country, and I could scarcely see my home hidden in the haze.

I felt as if I were wandering in a fairy land. The streams of the haze hung over the row of pine-trees on the bank of the river Yoshino, which through the dense mist was seen. The hazy view seaward from the top was very beautiful. Many sails hither and thither were slipping on the hazy, calm surface of the sea.

Morning, oh; one of the beautiful forms of Nature! which are to enlarge and purify our souls, and to fill them with noble contemplations.

"Not many people, I am sorry to say, see the dawn of day; and yet it is full of beauties that are never seen at any other times. At no other hour is the world so calm and so beautiful as it is at sunrise."

For all the blessing that they live in such a calm and beautiful scene, they never get a real view of what is about them. It is because they do not get up early.

These beautiful views are the possession only

of those who rise early, and not of those who remain idle in bed until late in the morning.

WHY JAPAN IS THE MOST POWERFUL NATION IN THE WORLD.

By Yoshio Murata, V. A.

What has made Japan so invincible in the world, that she has never been defeated? You will not hesitate, I believe, to say, "It is the work of Yamatodamashii." Then what do you mean by Yamatodamashii? You will say, I think, that by it is meant loyalty, patriotism, filial piety, sacrifice and perseverance. But consider it over and over. Filial piety is found among the humble Chinese; even among animals and birds. And you see, I think, the formidable perseverance displayed by Germany in this present war.

from foreign countries.

I hear that soldiers of other countries will surrender after doing their best at war and their nations think it laudable. But soldiers of Japan will exert their utmost until death, and never surrender.

Thus Port Arthur was destroyed by the human bullets of our soldiers of army, and navy. This is the work of sacrificing patriotism. Fearlessness of death produces a wonderful and great power.

The above mentioned facts are the reasons why Japn is the most powerful and glorious of all nations and Japan will continue to be so unless the Japanese lose the spirit of sacrificing patriotism.

ADVICE TO PESSIMISTS.

By Toshiki Isono, V. B.

Do not mention in mournful numbers, "Life

Thereupon we see the only pride of Japan far above other Powers is the spirit of sacrificing patriotism. This spirit was displayed by Kamatari Fujiwara, when he killed the traitor, Iruka Soga; by Kiyomaro Wahe, when he foiled the friendish plot of Dokyo, at the risk of his life, for the emperor; by Masashige Kusunoki, Akie Kitabatake, Taketoki Kikuchi, Nagatoshi Nawa, and Masatsura Kusunoki, when they co-operated to kill the notorious rebel, Takauji Ashikaga, even though their efforts ended in failure; and so on.

In recent years Commander Hirose in Port Arthur, Lieutenant-Colonel Tachibana on Nanyan, fought desperately until death in the Russo-Japanese War. General Nogi followed his late Majesty to the other world by killing himself.

Thus the Imperial line has continued and will continue forever. The august virtue of their Majesties has been glorious for more than 2500 years. Japan has never received any disgrace

is but an empty dream." This is a cry of the fellows who wish to find an excuse for inaction.

Life is effort. Effort presupposes success. Enduring effort requires a strong will. A strong will can conquer most difficulties.

The value of life lies in the present. We cannot live in the past or in the future, but only in the present. So our existence is realized in the present.

The relation between the present and the past is nothing but that the conditions of the present consist of the successive consequences of the events of the past, and as the future oak lies folded in the the acorn, so our future lies in the present. So it is foolish to be absorbed in the past or long for the future too much.

The more we exert ourselves to the utmost, the more deeply and bitterly we are able to know how great the value of life is. So we should be such persons as understand the great value of life,

Above all, at present we must patiently use great effort in the face of all the difficulties in the way of success. Success brings happiness. Indeed, sterling happiness comes by way of effort. The really happy men can understand the value of life to be undervalued.

The so-called pessimists deny the great value of life. They have already given way to the obstacles of the world. They have no determined will. So they cannot make an enduring effort towards success. They at last can not enjoy the happiness of life. They may themselves consider that the world has gone against them, but in fact they have been their own enemies. Many of them perhaps wish to depart this life or retire into the mountain solitude.

Are they going to get the perfect replies of God on the value of life and other problems by returning to the silence of death; or are they going to enjoy peace of mind and repose of heart,

by being transported by undying love of nature?

Disregarding life is not real existence, and independently of effort there is no value in life.

Oh: all Pessimists! It is enduring effort, not death or retirement that gives the solution of your questions. Are you to have the perfect solution at the cost of your lives or abilities spent in common affairs? Then you are paying too much value for the solution. Indeed, effort is the key with which you are able to open the great tower of your questions that holds its peace forever! But the value of life is denied to those who will not use the proper effort for this purpose.

Stride on at present with an iron will. There is the real effort. Effort will bring you success followed by happiness. Upon this, you will be able to understand where the value of life is, and how great it is.

The following poem is your important and necessary maxim.

Industry means that there are many large workshops in which many things, fine and good, are made.

Those which are manufactured are the most exquisite weapons, useful drugs, and the most ingenious machines, to be used in communications, besides other needed articles.

Now think of the European War. We cannot help feeling admiration for the Germans who are now fighting on, surrounded by powerful enemies, though they frequently acted unlawfully against the Allies and the neutral powers. And they are now actively afflicting the Allies, utilizing many submarines, aeroplanes, and airships, several hundred steamers of their enemies and have attacked England and France as many times.

How powerful the Germans are that they should not yield to the attack of the Allies! On turning over the Englishmen in our mind, we find them also very strong, for they can bear their great damage in calmness.

Life is real! Life is earnest;
And the grave is not its goal;

"Dust thou art, to dust returnest,"

Was not spoken of the soul.

Doesn't the immortal truth dance in the words?

On Industry.

By Hideo Fukugawa, IV. A.

As nourishment is essential for everybody, so industry necessary for every state. If industry is not found in a state, she will surely decay within several years. It is because industry is the origin of everything that makes the state grow prosperous. No matter how much courage and perseverance all the soldiers of the country may have, or how much the government of the ruler may be fit for the people, it will be of no value for the country when industry does not thrive. Prosperous

These two currents of the powers flow from the prosperity of industry. But the war will sooner or later come to an end. And then a great war named Peaceful War will occur and this must be more severe than the present war.

Almost all states, after that great war, China, the Balkans of the East, which is now quarreling, one province against another, in its family, will be looked upon as the best destination in the world.

Then the nations will rush at this vast battlefield with industry as their arms. At that time the country which has the development of industry will certainly gain the glorious victory. Therefore we can say that a state owes her development of power to the prosperity of her industry.

You must be very careful not to destroy industry, but cause it to grow prosperous. When it is lost, you and your fatherland decay too!

In the same way, the filthier one's native place is, the more he yearns for it. On coming to this locality full of picturesque views, my heart, which had never been touched by such natural beauty, went pit-a-pat with astonishment. And I was absorbed in the fine views to perfection until I forgot everything else.

However, at night, the things which appeared at my lonesome pillow were not the fine scenes, but were the gray mountain, the muddy river, the dusty spire, and the noisy street. Seeing cherry blossoms glistening in the clouded moonlight, walking on the beach in the summer evening, admiring the brilliant moon in the autumn night, I remember first the dear, dear home.

When an international exhibition was once held at San Francisco in the United States, a party of Eskimos were summoned to the exhibition, where everything was at first very pleasant and strange for them. They passed days in dreaming,

My Native Country.

By Yoshio Shiga, IV. B.

Man sings in praise of the beauty of his own native place. He boasts of the calmness of his mountain and the clearness of the river. But, sad to say, I have nothing to speak of. No hero has appeared and no romance has occurred to ornament the history of my native town.

The gray mountains are depressing as if they object to being seen by the people. We cannot hear the tone of trickling water and never see the wide elegance of the sea. Moreover the firmament is always covered with black smoke dashing out of the chimneys which close together. The people in the city fidget in the dirty air and uproarious sounds

Though the daughter is very ugly, her mother does not hate her, but on the contrary she feels pity for her unfortunate child.

but by and by their mania quieted down gradually, and they began to attempt to escape. Where was their destination?

It went without saying that it was their birthplace where nothing could be seen on the white snow, covered all over the wide plain. The Russians in northern Siberia wish rather to live with polar bears on ice than in warmer provinces.

How fast we travel when we go home in spite of the fact that the way between Hagi and Yamaguchi is very steep!

Then, why are we fond of our homes so far as I have described? It is because home is the place where the first feelings, that do what one can, he cannot forget, were engraved. And most, or perhaps all, it is the place where one was born and one's childhood was passed. That is to say the home is a holy palace consisting of past memories and fancies.

And the sense of loving one's own home

is like a diamond, the most beautiful, refined and profound of all senses.

Our Trip.

By Kan-ichi Komatsu, IV, B.

On the morning of August 27th, our party consisting of five boys, left my home for Oi to admire the seascape. The sun was much above the eastern mountains, and sending us pitiless rays, which were very hot. On going over a pass, we reached the top of Hagano-dai. This place is the spot where the military drill took place in the Tempo era. We stopped there for a moment and overlooked the Japan Sea, spreading out like a large picture. In the near distance, we could see large and small islands lying like forts in front of us, and white sails sailing among them. In the far distance, green Mt. Shizuki,

Mt. Kasayama, and others entered into the view. The gentle, noble and fine view of nature was really beyond the power of language to describe. Then we began to descend the mountain. After thirty or forty minutes, we arrived at our destination, the beach of Oto. The wind was coming over the waves from the far distance and was blowing our sleeves. It was so agreeable that we felt as if we were in autumn, in spite of midsummer. After a while, it became noon, so we took our luncheon on the coast. It was very nice. Then we began to catch fishes and to gather shells. During this time we also swam. Indeed we live in the country, but we can swim well. It was really interesting. The sun was still high, but it was 5 o'clock. So we bid good-bye to the beach. We went to Kasayama to see the pond named Ochaya-no-ike. Many fishes were in the pond whose names we did not know. We bought some bait, and gave it to them. They

shoaled to gain it, and violent competitive struggles, like those among human beings, began. We may say we could see, as it were, a phenomenon of the inside of the sea. It was 6 o'clock. Admiring the view of the shore we went to Obata. The sun was nearly setting into the western sea and a great deal of gold was dropping into the ocean from the sun. "That will be the richest place in the world," I thought.

The road from Oi to Obata was very smooth, but from Obata the Pass was rough. It was very hard to walk because of fatigue and hunger. We stopped half-way on the pass, and looked back. The sun was quite set and masses of cloud on the horizon were light, and the black shadows on the nearer mountains and islands in the offing were deepening those colours. I felt a slight sorrow.

Soon the night completely set in, and became quite dark because there were no moon. All was silence save the sounds of our steps. We sang

some songs to cheer ourselves. We reached the end of the pass at 9 o'clock. From here the road was smoother, so that we could return to our homes easily at 10 o'clock. What an interesting, but painful, trip it was!



修學旅行記

九州方面

五月十五日、一には、近時活躍し來れる九州北部の都市を、觀察研究して、見聞を廣め、二には、平素修練せる團體的行動を實施して、身神の修養に資すべき、最も價値あり、意義ある修學旅行の日は來れり。午後十時四十分金谷祠前に集合す。神社に旅行の安全ならんことを祈りて乃ち發す。一行は、足立、金子、梅村、池上、山本の五先生に引率せらるる第四五兩學年生百二十八名なり。前差に多大の期待を有する一行の元氣は、實に當るべからず。隊伍整齊、軍歌を高唱しつつ歩を進む。一升谷の險阻も何かあらん。夜中踏破す。

十六日、快晴。東天漸く白む頃、一の阪の難關を越ゆれば、山口は正に眼下に在り。旅館中川に憩ふ。六時を過ぐる三十分なり。時を經る僅に八時間餘、以て如何に一行の健脚にして、元氣の旺盛なるかを見るべし。發車時刻に聞あればとて、希望の者は、香山、龜山公園に到る。一として、防長勤王の事蹟を語りざるはなし。十時十二分山口驛を發す。宮崎長嶺諸兄の見送を忝うす。小郡驛にて乗換へ、山陽本線に入る。埴生を過ぐる頃、遂に波靜かなる瀬戸内海を望む。午後一時三十分着關、萩會の坪井、石津其他の先輩諸君、懇々出迎へらる。赤間宮及安德帝の御陵を拜し、名高き春風樓を觀、次いで萩會の催しに係る山陽ホテルの歡

右第五學年中村博識す

迎會に臨み、鄭重なる茶菓の饗應に預り、本校開校記念歌を合唱して別を告げ、直に關門聯絡船に投ず。關門は、流石に、本邦西部の咽喉を扼する兩港なり。大船巨船の數多碇泊せる、小汽艇の繁く往來せる、その活氣の横溢、到底封建的組織の存せる萩に比すべくものにあらず。更に、近來勃興せる此の地方の製造工業は、一層目覚ましき活氣を呈しつつあり。門司の淺野セメント會社、大里の麥酒、製粉、製糖等の諸會社、彦島の碓曹會社等の煙突、遠近に林立せり。下關港の市況の、門司に比して、振はざるが如く見ゆれば、遺憾なり。港内を右顧左眄する内、門司に着す。先輩柴田門司驛助役また此處に在り。その案内にて、市街の活況を見たるものもあり。五時四十分發して博多に向ふ。沿道に工夫の往來多く、石炭の堆積せる工業地の空氣横溢す。八幡には有名なる鐵工所あり。巨大なる煙突、溶鑪等車窓近く見ゆ。構内に敷設せる鐵道、延長六十哩、職工一萬人なりと聞きて、如何に其の規模の宏大なるかを知るべし。實に東洋第一の名に負かず。汽車は、進み進みて、遠賀川の鐵橋を渡る。古賀の砂丘を見らば、博多驛に著す。時に八時三十七分なり。旅館第二高島屋に投ず。一時間の散歩を許さる。唯電光燦爛たる市街に、電車の往來繁きを見るのみ。十一時就寢。疲勞は睡眠を促して、忽ち華胥の國に入る。

博多に歸る。十一時までの自由散歩を許せらる。一度旅館に歸り、錢湯に入りて、元氣を恢復したる我等は、各自思ひ思ひの方面に、散歩を試みたり。或は縣廳方面に行きたるものもあり。或は水族館に赴きたるものもあり、余等數名は東公園に遊べり。抑東公園は、數十町の開青松連り、千代の松原と稱す。青松の間に高く聳てるは、龜山天皇の御銅像と、日蓮上人の銅像なり。高さ軌れも七十尺内外なりと云ふ。以て如何に巨大なるかを知るべし。園内には猶元冠記念館あり。元冠當時の遺物を藏せり。大學病院附近し。これより箱崎宮に到りぬ。暮色漸く迫り、扁額の文字も見分かつ。老松の間、編編二三羽、寂しげに飛び居たり。直に旅館に歸る。

右第五學年横山真晴識す

十八日、快晴、五時半起床、九時博多驛を發して歸途に就く。四邊の景色、今更名殘惜しけれど、汽車は情なくも、東へ東へと走り去る。正午門司に着き、下關小郡を経て、夕刻山口に着す。着するや否や、宮崎長嶺諸兄の幹旋にて、直に高等商業學校の、商品陳列場の參觀に赴き、多大の利益を得たり。終りて、中川香川兩窟に分泊す。夜宮崎長嶺等の諸兄、我等の爲に殊に茶話會を開かる。深く感謝する所なり。

十九日、快晴、五時半起床、歸萩の途に就く。暑氣漸く催し、一の阪の嶮先づ困難なり。途中豊浦中學四年生諸君の、萩より歸らるゝに會ふ。互に一掛して勞を慰す。佐々並にて費食し、元氣を快復し一升谷を越ゆ。五時金谷祠前に着し、旅行の安全なりしを謝して解散す。

右第五學年中村博識す

を許さる。街路は朝露に濡れて、些の塵も立たず。青柳の糸を、靜に靡かす朝風の心地善さ、精神新に爽快を覺ゆ、昨日の疲勞は全く忘れ、七時五十三分、元氣發瀾として、大牟田行の列車に投ぜり。一同喜の色に輝き、或は窓外の景色を賞し、或は地圖旅行案内等を繰るもあり。汽車は、昔々としたる島の間を走ること二十分、二日驛に着す。有名なる太宰府天満宮は、驛を去ること東北約一里なりと聞く。右窓に遠く天拜山の靈姿を望む。原田驛を過ぎ、佐賀縣に入るや、曠漠たる筑紫平野は刻一刻に展開し、窓外の風光宛ら給の如く、鳥栖に達すれば、いよ／＼開け、西南の一方、殆ど山影を見ず。車窓より望めば、一望皆肥沃の平野にして、隨處の起伏せる所、行人の目を惹くは、檀の木影しき、ことならん。これ佐賀縣農産物の一なりと知らる。筑後川の鐵橋もいつしか過ぎ、九時五十分大牟田に着す。停車場には、既に、林新作、林俊香二氏の、我等旅行隊を歓迎せらるるあり。一同は、兩氏に案内せられて、驛を發しぬ。抑、大牟田は、九州西部の大工業地を以て目せられ、三池炭田の豊富なる材源を控へ、工場其他百事業近世科學の力を應用し、市況最も活動的なり。我等は塵埃に塗れ、煤煙の下を潜りて、船渠に到る。關門裝置によりて、巧に海水の干満を利用せり。林氏丁寧に説明せらる。一行は更に歩を轉じ、高田の炭坑に向へり。先づ最も我等の注意を惹きしは、総て機械の大規模なること是なり。發車時刻の都合上、大略の觀覽に止め、蒼黃として停車場に向へり。

午後一時三十四分、大牟田を去りて歸途に就けり。車中にて、兩氏より贈られたる物品を分配せらる。感謝に堪へず。四時五十分、

部長及係委囑

四月十三日、各部長及係の委囑あり。其の結果左の如し。

劍道部長	田原 教師	柔道部長	廣田 教師
辯論部長	正木田 教師	書道部長	安藤 教師
副部長	副廣田 教師	書道部長	田總 教師
地歴部長	梅村 教師	庭球部長	木田 教師
野球部長	船木 教師	漕艇部長	山本 教師
水泳部長	相島 教師	雜誌部長	金子 教師
褒賞係	頼野 教師	器具係	足立 教師
庶務係	猪川 教師	會計係	岡田 書記
	三輪 書記		

各部委員選舉

五月二十五日、各部委員の選舉行はる。當選者左の如し。

劍道部	岩崎 小一	藤井 正巳	山本 忠之	阿座上源助
	寫海 一	井町 敏正	長嶺 幸三	金本 龍一
	天野 敏介	津森 三郎	田中 俊治	藤原 勝利
	松本喜八郎	小川 薫		
柔道部	金子 重雄	西永 彰治	伊藤 敏三	高原 啓介
	今田 正一	小松 威一	福本 稔甫	河村 直勲

辯論部	山中 吉郎	羽仁 通祐	桑原 松次	吉田 博
	内藤 貫之	坪井 乘雄		
	田村 春秋	尾崎 信一	瀧口 純	吉村 潤一
	武田 正志	志賀 義雄	藤井幸太郎	瀧口 吉繼
	天野 敏介	山縣 政	宮内 謙吉	宮國 秀彦
庭球部	野村 龍介	伊藤喜兵衛		
	奥田 清	藤村 六雄	田代 誠	山崎 次郎
	井上 庸三	平田九郎治	堀 儀一	尾木 忠夫
	佐々木正秀	津森 三郎	岡崎 信之	西田 正道
野球部	岩田 芳夫	光藤 秋一		
	大崎 龍起	尾藤 尙	原田 信治	阿座上源助
漕艇部	中村 敏雄	石井 直太	山本登代治	山本 利秋
	小澤 重一	岩崎 小一	高原 啓介	原田 信治
雜誌部	山本 義男	前田治郎吉	玉一市五郎	村木 榮彦
	中村 博	尾崎 信一	恒石 八郎	田中 政太
	河村 宜介	横山 真晴	福川 秀夫	河村久三郎
地歴部	井上 盛義	高羅 芳光		
	平田 繁一	竹内 眞一	藤原 敏男	高羅 芳光
	矢島 真雄	岸 新一	櫻井 武三	松屋初五郎
書道部	岩武 且	田村 豊	藤井 鎮夫	河内健吉郎
	今田 泰	國近 圭三	田中 政太	林 尙武
	上川 忠夫	鷺海 一	山田 孝介	熊谷 眞夫
	内田 秋藏	堀 敏一	三好 城輔	松村 六郎
	三戸 通夫	石洋 有恒	松屋初五郎	篠原 智雄

鷺海君の掛退の敏速なる、電光石火の如し。井町君の業眼度、共に天晴達人の風あり。實に我が校の將たり。益々練磨せられんことを乞ふ。當日の番組並に勝負左の如し。

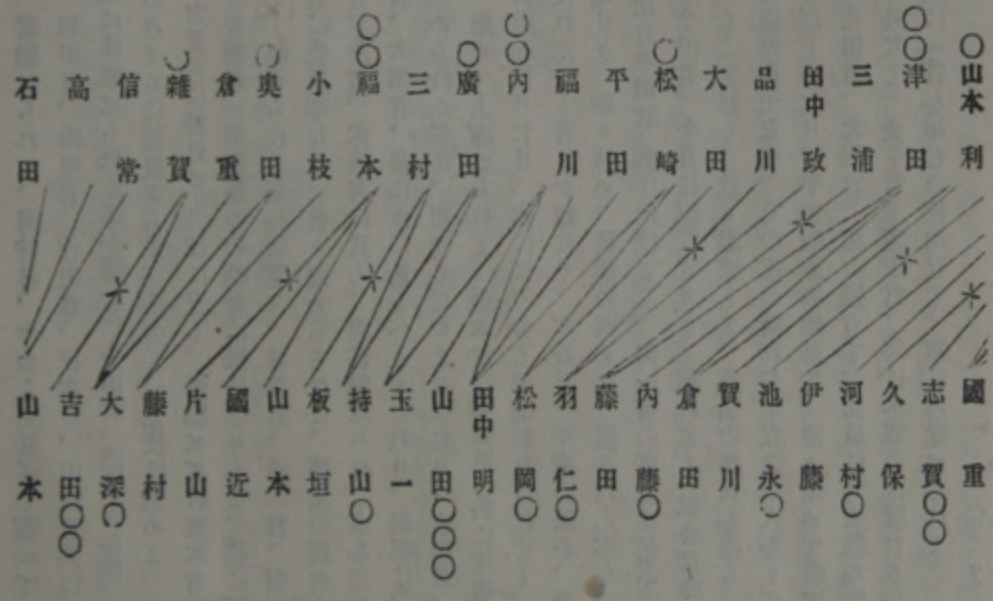
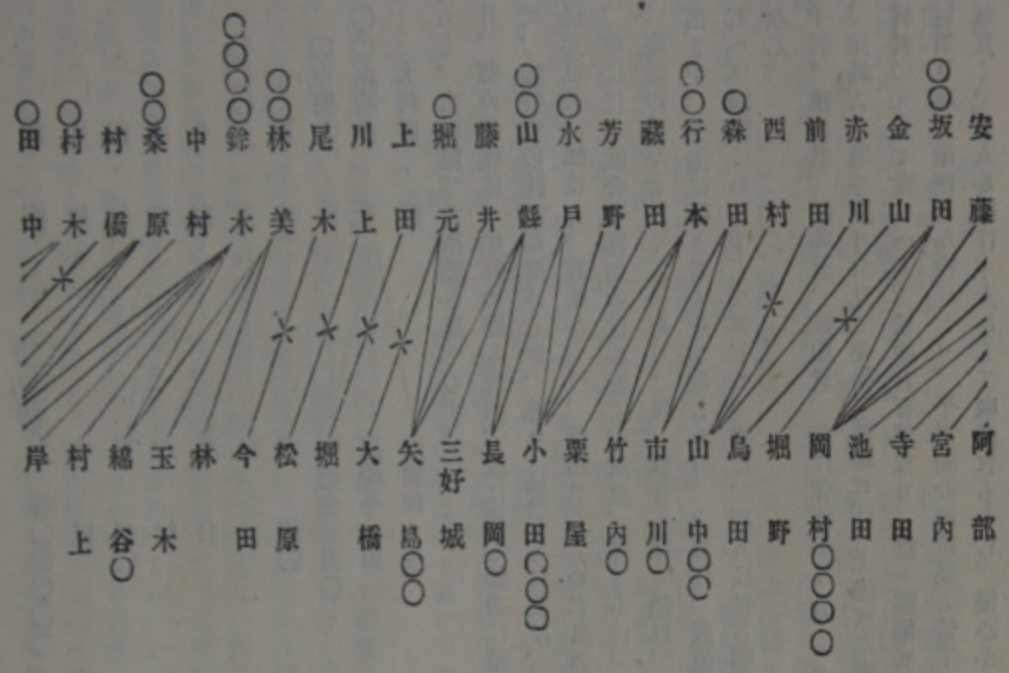
五月十二日、午前九時頃より、春季劍道大會を舉行す。田原先生審判の下に、元氣旺盛なる劍士立ち入り代り、壯烈活潑なる激戦も滞る事なく、午後四時頃、畢りを告げたり。此の日の仕合の批評を少しく試みん。

技術は一般に進歩せるを認む。而して禮儀態度も亦以前に比し良好なりしが、氣合の掛からざりし者を一二認めしは遺憾の至りなりき。次に個人に就き二三批評を試みん。有田君、よく大敵を七名斃せしは感服なり。栗屋君は六名、村木君は九名、共に有望の劍士なり。長嶺君、平素に比して奮はざりしは残念なり。されど勝敗は願慮するに足らず。中村君、將來有望の太刀筋あり。篠原茂一君の劍、甚だ鋭し。下田君、小兵にして好く大敵四名を斃す。

劍道部記事

藤田 真平	岩武 且	篠原 勝利	宮國 秀彦
國弘 重幸	椿 正義	原 吉雄	藤田 健一
田中亥之助	片山 弘	河村 宜介	横山 真晴
和田 義忠	前田 壯一	百濟 芳雄	和田 章
阿部 芳甫	平田 胤春	玉木 正夫	赤川 傳
井本 清	厚東誠七郎	二鈴木 研介	梶山 武夫
岸田 隆吉	椿 治六	高田 真雄	岡村 健二
藤井 鎮夫	松本喜八郎	松尾 忠義	伊藤喜兵衛
村田 美徳	鈴木 正夫	有福 精一	山本 信明
花田 好定	田中 明三	入江 糾夫	村上 壯一
器具係	石田 藤一	河村久三郎	松浦 孝義
			小松 成一

富田 子	金子 山	和山 田	弘山 田	小島 本	橋本 本	林本 本	板垣 本	兒玉 本	吉田 本	有田 本	阿武 本	鈴木 本	岡崎 本	西田 本	石津 本	熊井 本	厚東 本	梶山 本	森田 本	
志熊 隆	小林 隆	阿武 隆	安田 隆	山根 隆	橋本 隆	植村 隆	植村 隆	北川 隆	村木 隆	有田 隆	戸田 隆	田中 隆	三上 隆	瀧口 隆	若松 隆	來見 隆	田中 隆	三戸 隆	小林 隆	
椎守 木	守重 木	田中 木	世真 木	阿部 木	植村 木	植村 木	西村 木	佐々木 木	三好 木	永好 木	福江 木	櫻井 木	天野 木	津森 木	柴田 木	松岡 木	堀井 木	土井 木	松本 木	

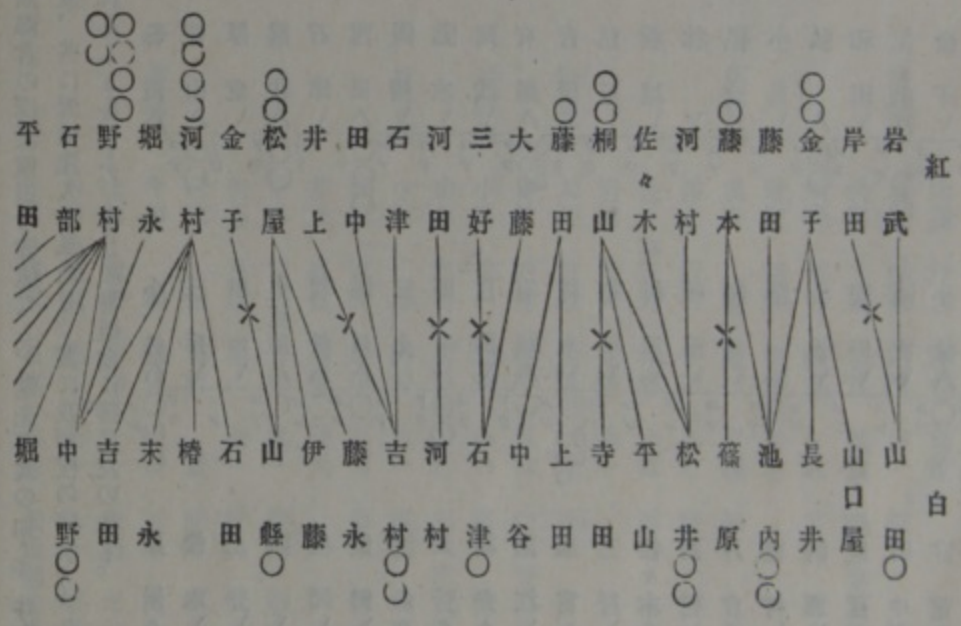


五月十二日、午前九時より、我部は、春季大会を舉行す。本年は、未曾有の演武者を出したる爲め、時間の都合上、午前中は、之を分ちて二組となし、廣田、中村兩教官審判の下に試合は催されぬ。

柔道部記事



(山本忠之記す)



當日の試合番組左の如し。



暫らく、右に對する所感を述べむか。
 此日、初めの程は、始終の禮を忘れ、或は帶を後方に結ぶ等の事にて、審判官の注意を受けしが、終りに近づくに及び、次第に、禮儀元氣共に加はり、觀衆をして、嚴肅ならしめたりき。然れども、中には、試合中無用の言を弄し、或は、殊さらに、滑稽を演じ、觀衆の笑をまねくものあり。又、試合を深く恐れ、始終、技を出さず、平素は強き者も敗を取るあり、之等は、武道上、最も忌むべき缺點にあらずして何ぞや、次に、個人に付き聊か妄評を試みん。
 金子君、池内君、松井君、桐山君、共に体軀小なるにも係はらず、元氣よく敵を敗りたり。今後、奮勵せば、上達せん事疑なし。吉村君の元氣や愛すべし。松屋君有望なり。益々奮勵せられよ。河村君見事に敵四人を投げたり。平素熱心の結果と信す。野村君元氣長く、六人を投げ、人をして爽然たらしむ。慢心を發する事

無く、奮勵せられよ、岡村君、今少し元氣長く戦へば、將來有望なり。坂田君、山中君、竹内君、行本君、山縣君共に元氣あり。只、技に注意せられん事を望む。小田君、敵三人を投げたれども、寝技のみするは面白からず。今少し、立技に勉めよ。三浦君、堀元君、力量人に勝れども、技に乏し、奮勵せば將來大有望なり。今田君、大橋君、平素熱心の割合に振はざりしは、技に乏しかりしためか。勉められん事を切望す。林英君、鈴木君、羽仁君、桑原君、共に技見事なり。益々勉めらるれば、將來の覇者たるべし。山田君、内君、体技共に良し。尙奮勵せられん事を望む。綿谷君、廣田君、大深君、共に技に見るべきものあり。我部は、諸君の、益々勉められん事を、切望してやまざるなり。吉田君、体技共に良し。勉めて上達せられよ。福本君、難賀君、共に技敏活にして、能く大敵を敗りたり。体には、少しの缺點なれども、今少し技を學ばれんこと吾人が願なり。大谷君、平素の熱心、効を奏し、見事なりき。益々勉め、我部の爲めに、盡されん事を望む。百濟君、小松君、平田君、共に体技よき。尙一層の奮發を乞ふ。田代君、阿武君、今田君、今日は振はざりき。然れども、試合は時の運なり。悲觀すること無く、益々勵精して、最期の勝利を得られよ。見玉君、新進の勇士なり。その技の晴れやかなる、人をして思はず快哉を叫ばしめたり。平素鍛練の効果が。益々勉めて將來を全うすべし。花田君、大岩君、相も變らず、元氣にて大敵を敗りたり。心服の外なし。金子君、西永君、共に本部の白眉たるを失はず。体に技に一言を挿むの餘地なし。幸に自愛せられよ。
 (T Y 生)

漕艇部記事

五月二十六日、例年の行事にならつて、我が五百の健兒は、初夏の阿武川に壯絶な漕艇部大會を催した。記念日當日は日曜であるので、此日を擇んだのである。朝から、澄み渡つた大空に爛々と輝く太陽が、先づ、健兒の意氣を高潮させた。午前七時半、一同、登校して、清須少佐の海軍機關部についての講話を聴き、同九時各中隊は、夫々、丹誠を凝した旗旗をかざして、隊伍整然、英姿蕭々として、橋本川の兩岸に陣ざる。廣い碧空には一片の雲もなく、四方を圍む山々が、その濃い影を落して、阿武川の水に藍色に澄みきつてゐる。午前十時十五分、競漕を開始した。それより漸次回を重ねて、第十回目の第一中隊對第二中隊の選手競漕になると、幾多の健兒は勇氣を漲らして、應援にすべてを忘れる。橋の上から兩方の岸にかけて、觀客の姿が華かな色彩を作つた。歡呼の裡に二隻の船は出た、兩中隊の意氣は益々高かつたが、勝負は五角であつた。
 午後一時半、午後の競漕は開かれた。洋々とした樂隊は、雑音の中に流れて、人々の胸から胸へ歡喜の響を傳へて行く。同四時、第三中隊對第四中隊の選手競漕となつた。嚴肅な中に校歌を奏して、選手の擧を壯にする。應援の聲の未だ絶えない内に、第四中隊は見事可成の間隔を置いて決勝點へ這入つた。それから數回の後職員競漕來賓競漕及び卒業生競漕等があつたが、いづれも痛快で興を添へた。最後に月桂冠を争ふべき中隊選手競漕に、健兒の血潮は、新に熱して狂せんばかり。前回勝敗不決の一二中隊に第四中隊を合せて三隻の船、折から沈む夕陽を浴び選手起つて、そ

の面には期勝の光がありくと動いてゐた。夕潮の満々とたたへて、紫に輝く夕やけ雲をうつした河面を三條の直線を残して、矢の様に滑つてゆく。應援歡呼の聲は、天地を震動した。而して遂に勝利は第二中隊に歸した。個人競漕に於ても、今回は、特に中隊に對する觀念が強く、必敗とは知りながらも、悉く最後まで奮闘して大いに元氣があつたのは、最も喜ぶべきことである。かくて各中隊の勝利數は、第一中隊が八、第二中隊が二、第三中隊が三、第四中隊が六であつて、第一中隊の勝利となつた。即ち當日の金星を得たのは第二中隊と第一中隊とであつた。左に當日の中隊選手を記す。
 第十九回
 (勝) 第四中隊 山本 義男 正一 今田 孝介 山田 五郎 藤田 孫一
 (敗) 第三中隊 前田 治郎 吉 岸 新一 山本 登代治 松村 六郎 河上 勇治
 第二十八回
 (勝) 第一中隊 村木 榮熊 笠原 二人 平田 九郎 大 阿部 弘 野村 茂
 (敗) 第二中隊 玉一市 石 和 田 義忠 河村 久三郎 板谷 三郎 板谷 一馬
 (敗) 第四中隊 山本 義男 正一 今田 孝介 山田 五郎 藤田 孫一
 (勝) 第一中隊 藤田 孫一
 (敗) 第一中隊 板谷 一馬
 (岩崎小一記す)

野球部記事

六月十三日放課後、グレイム先生、審判の下に第二中隊對第三中隊の試合を舉行せり。第三中軍は甚だ振はず、加ふるに、正投手の不参にて陣形亂れ、常に、第二中軍に制せられしが、終りに至り、極力奮闘努力せしが如何ともし難く、名譽の月桂冠は終に、第二中軍の手に歸せり。

當日のメンバー左の如し。

- (中二) 大井 百田 尾石 鹽進 津
- 岩上 濟村 藤井 見藤 森
- P C IB II B III B SS LF CF RF
- 杉本 中松 津山 友河 坪
- (中三) 木村 村田 本森 村井

六月十四日グレイム先生、審判の下に第一中隊對第四中隊の試合を開催せり。始めは、兩軍共に大差なかりしが、終り頃に至り、第一中軍は、敵の虚に乗じ、好機逸すべからずと、大いにその秘術を盡し力戦せしかば、第四中軍は、大敗を蒙り、遂に立つ能はざりき。

當日兩軍のメンバー次の如し。

- (中一) 和田 阿松 三堀 前内 長伊
- P 田上 岡上 田藤 嶺藤
- C IB II B III B SS LF CF RF
- 中今 倉雜 奥清 篠山 板
- (中四) 村田 重賀 田友 原田 垣

片山君満面に笑をたゞへて起つ。他の多く大問題を扱ひしに比し、君の常識を説きしは奥あり。されどその態度言語にあきたらざる感ありしは、惜むべし。幸に反省せられたし。藤井君は徒に、説明に偏し、言、語句の排列にすぎず。伊藤君満堂を一睨して大聲叱呼、憤りの可否を論ず。將來畏るべき活辯。宮國君説く所精細なりと雖も、長談議にすぎ、人をして倦ましめ、且つ徹底的結論を得ずして終る。林君泰然として、偉人を説く。有望なる一人たるを失はず。宮内君固々たる眼光満堂を射、辯論痛快にして種妙なり。されど君は外観に勉めて、内容を忽にする無じとせず。野村君大和魂の威力に大氣燦を吐く。吾人は君の將來に期待を有す。浦口君圓熟したる辯舌も、論旨一貫、保守と進取とを論ず。願くば本部の爲、益勉められんことを。田中君は初めて論壇に立ち顯る成功す。君自身の所謂自然主義を説きて、他利自利の問題に及ぶ。穩和なる議論を輕き語彙を含みて、諄々と説けるは、君の性質の表現とも見るべきか。唯熱誠今少し加はりたらんにはと思ひき。吉田君精ある振にて、海國思想の養成を論じ、目下の海國男子の志氣の不振を嘆す。今日の驍將益本部の發達を圖られよ。高羅君君は思想豊富にして形容百出、譬喩口をついて出で、滔々數千言自己の経験より試験勉強の失敗をのべ、熱誠面に現る。誠に本日の白眉たるを失はず。されど辯舌稍早きに過ぎ、美辭を亂用して氣障な感を起さしめたるは、玉にきづならむか。乞ふ、更に一步を進めよ。平田君修學旅行土産に、倦怠したる聽衆を、蘇生せしむ。然れども吾人は疑ふ。君は壇に立ち、身講堂にあることを忘れ居たるには非ざりしかと。

六月十六日午後三時より、グレイム先生、審判の下に、第一中隊對第二中隊の、決戦優勝試合を舉行せり。兩軍の選手熱血を注ぎ、又、應援の聲、遙か四方の連山に響き、克く防ぎ、克く攻めて、互に、鎗を削る事四時間ばかり、月桂冠は、遂に、第一中軍の得る所となり、名譽ある優勝旗は、第一中軍の頭上に飾られたり。時は、夕陽正に西山に没せんとする頃なりき。

當日の兩軍の、メンバー左の如し。

- (中一) 和田 阿松 三堀 前内 長伊
- P 田上 岡上 田藤 嶺藤
- C IB II B III B SS LF CF RF
- 大井 百田 尾石 鹽進 津
- (中二) 岩上 濟村 藤井 見藤 森

(G A 生)

辯論部記事

六月廿日午前十時春季大會を舉行す。先づ木田部長の講堂の神聖なるべきこと、並に出演者の態度言語等につきて、懇切なる注意をかれし開會の辭あり。

英語部。山中君あまりに早口にして、深き印象を聽衆に残さざりしは惜むべし。幸に一層の努力を望む。村田君流暢を缺きしも發音は可成よし。自重は辯論必須の要件なり。二年三君の對話は、音聲態度共に真好にして、正に今日の白眉なり。武田君惜むらくは、活氣乏しく、變化なかりき。金聲君の失敗に終りしは、練習不足に由るか。市川君暗誦十分、その聲調や、よろし。將來を待つ。井上君本部は此度君の如き、スピーカーを得たるを喜ぶものなり。その音明確、何人にもよく解りしならん。宜しく斯界の明星を期せ。かくて、午後三時半、プログラムは悉なく終りて、最後に校長先生の批評あり。曰く、「本日の辯論は稍々前期に比して真好なりと雖も、眞實に自己の發表を務めざりしは、尙缺點の大なるものなり。又態度に往々敬虔を失するが如きことあるは、以後大いに慎むべし。抑辯論は口術に非ず。熱誠の流露せんことを期すべし。徒らに、滔々たる辯を揮ひ、一時人を釣るも、熱誠の氣なく、謙讓の態度なくんば、眞の辯論の價値は認めがたかるべし。今後此點に注意して、此の道に務むべし」と。

一、開會之辭

部長

- 二、嗚呼我なる哉
 - 三、Crossing the Rubicon.
 - 四、智識の消化
 - 五、勉強は幸福の基
 - 六、Napoleon Crossing the Alps.
 - 七、真友を選ぶは吾人の務なり
 - 八、凡 理
 - 九、我國の陸軍
 - 一〇、Three Dreams. (Dialogue)
 - 一一、憤り
 - 一二、我等の使命
 - 一三、Abraham Lincoln.
 - 一四、偉人
 - 一五、藤栗毛
 - 一六、King Alfred and the Cakes.
 - 一七、大和魂の威力
 - 一八、保守と進取
 - 一九、我が自然主義
 - 二〇、The Crow and the Pheasant.
 - 二一、海國思想養成策
 - 二二、From Shimonoeki to Seoul
 - 二三、試験勉強
 - 二四、Remarks. (晝食後)
 - 二五、閉會之辭
- 四ノ一 河村久三郎
 - III. A. S. Yamamoto
 - 二ノ二 山縣 政
 - 一ノ三 藤村 正憲
 - V. A. Y. Murata
 - 一ノ一 宮國 秀彦
 - 五ノ二 片山 弘
 - 一ノ一 藤井 稔久
 - II. K. T. A. T. K. S. S.
 - 一ノ三 伊藤喜兵衛
 - 四ノ一 宮國 則義
 - I. A. A. T. Takeki.
 - 一ノ三 林 初人
 - 二ノ三 宮内 謙吉
 - V. B. T. Kaneko
 - 一ノ二 野村 龍介
 - 三ノ二 瀧口 吉繼
 - 五ノ二 田中 政太
 - III. R. T. Ichikawa
 - 一ノ一 吉田 博
 - N. B. M. Imoue.
 - 四ノ二 高羅 芳光
 - MY. Graham
 - 部 長
- (瀧口純記す)

山口縣體育獎勵出演記事

第二回山口縣體育獎勵會は、七月二十二日、山口に於て開催せられ、劍道試合は、山口師範學校道場に於て、柔道試合は、山口中學校道場に於て、何れも演ぜられたり。我々よりは、左の六名をして、出演せしむ。

- 劍道部 井町 敬正 阿座上源助 阿武 二郎
- 柔道部 兒玉 三郎 西永 彰治 金子 重雄

今、柔道部に於ける當日の成績を得たれば、之を略記せんに、兒玉君、敵二人を倒して、三人目に引分となり、先づ味方の爲に氣焔を吐く。西永君、見事に敵五人を屠りて、味方の旗色益々其し、金子君立つに及びて、敵の副將中堅を倒し、大將大内初段と悪戦苦闘して、遂に敗れしも、味方の大將仲小路初段出てて止を刺す。選抜試合に於ては、西永君四人を抜きて二等賞を得たり。さて、今回の試合に於ては、勝敗は姑く措き、我々選手諸君の、横溢せる元氣もて、正堂堂と闘ひ、観望者一同をして感嘆せしめしは、我々武道部の名譽とする所なり。

(S. K. 記す)

大日本武徳會青年會出演記事

例年の青年大會は、八月五日より五日間、京都武徳殿に於て開かる、我々よりは、左の四名を選手として出演せしむ。劍道部、阿武二郎、山本忠之、柔道部、高原啓介、伊藤敏三。選手諸君は、此の槍舞臺に於て、よく平素練習の効を表はし、山本高原伊藤の

諸君は、名譽の賞牌を受領せられたり、當日の番組及成績は次の如し。

- 〇〇本校 山本 忠之
- (奈真師範 某)
- 〇〇本校 阿武 二郎
- (福知山農林片岡 某)
- 〇〇本校 高原 啓介
- (關西學院 中濱 直治)
- 〇〇本校 伊藤 敏三
- (三重師範真弓 護)
- (S. K. 記す)

係 更 迭

九月十日、今回器具係足立教諭轉任に就き、船木教諭其の後任として、同係を委嘱せられたり。

運動會記事

十月十八日、白楊樹青き運動場に於て、第十八回陸上大運動會舉行せられたり。此の日、白く立籠めし曉霧は、旭日の昇るにつれ、刻一刻薄れ行き、數日來の雨は、些の名残を止めず、全く霽れ巨りて、麗かなる秋日和となれり、午前九時四十分。忽ち煙火一發。静寂は破られたり。見よ。劉曉たる喇叭の音高く校庭に響くや、翻々と飄る校旗を先頭に、意氣揚々として入場せる吾五百の健兒の姿の如何に勇壯なるかを。竿頭高く飾られたる無數の小旗の紅なる、黄なる、アーチの縁と相映じて美観いふ可らず。莊嚴なる樂隊の合奏につれ、「四方に蕩りを」の合唱終るや、競技は愈々開始せられたり。煙火一發、又一發。競技はますます進行し、滿場生氣溢れんとす。時々清水先生の撮影あり。かくて午をすぎ

る頃より、觀衆次第に群り來り、二時三時となればさしも廣き運動場は、全く人の海と化じぬ。個人競技の種類は例年と大差なし。團體競技としては、五年四年の中隊教練、四年のマスト競争、三年の棍棒体操及び川中島、二年の壺鈴体操及軍艦競争、一年の旗体操、綱引、及百足競争等なり。かくて四時過ぎる頃、すべて競技終り、本月最終の競技たる中隊選手競争將に開始せられんとす。勇壯なる歡喜の聲に送られ、衆望を負うて、スタートに立てる中隊選手の勇姿を見よ。肩宇の間には、凜として決死の色閃くならずや。衆の視線ひとしくここに集る。號砲一たび空高く轟くと共に、紅白數百の應援旗は入りみだれ、應援の聲湧くが如く起りぬ。埒内を驅馳する勇士の華々しき姿よ。或は抜き、或は後れ、風を鼓して奮戦するさま、痛快にして壯絶を極む。眞に總身の血の湧き返らんとするを覺ゆ。先づ第一中軍の旗幟色めき、七回となるや阿武君出て益々勢を得、大勢まさに決せんとなす。この時第四中軍の猛者尾崎君突如として現る。君の疾走振り、眞に鬼神の如く、第一中軍阿座上君、死力をつくして、よく戦ひしも、勢の趨くところ、如何ともすべからず。長き恨をのこして下ほれたり。あゝかくして榮譽ある優勝旗は終に第四中軍の手に落ちぬ。時に午後四時四十三分。凱歌盛に轟く。折から。一大火焔の如き紅霞古城の空を騰脂よりも赤く焦爛し、アーチも中隊旗も人もみなまさに燃ゆんとす。

本日主なる競技、及優勝者左の如し。

第十八回、早延二千米。第一着 六分五十五秒、第三學年河村茂一

第二十回、同上。第一着 七分五秒、第三學年三村喜治

第六十九回、同上 第一着 七分二十三秒、第四學年山田孝介
右三名とも大阪朝日新聞社及大阪毎日新聞社より寄贈に係る
銀製メダルを受領す。
第三十三回、特別障害物。第一着 四分四十四秒、第五學年山本篤一
第六十五回、同上 第一着 三分十九秒、第五學年西永彰治
右の内、西永彰治君は大阪朝日新聞社より寄贈に係る銀製メ
ダルを受領す。
第七十五回、中隊選手競争。
第一着 第四中隊(五分三十七秒) 第二着 第一中隊
第三着 第二中隊 第四着 第三中隊
(横山真晴記す)

書道部記事

我校友會書道部は、十月十八日我校友創立第十八回記念日を以て、書道成績品展覧會を開催せられたり。連日の雨は、この日に至りて霽れ、近來珍らしき好天氣を呈し、午前九時より、一般公衆の縦覧を許可せらる。部長の指示せらるる所によれば、本年度書道部成績審査標準は、例年とはむほいに其趣を異にし、四、五、六、九の各月に一度宛、學校に於いて、一定の時間を以て課し、其の種類は、大字、中字、細字、ペン字、書簡字の五種にして、之に、其都度甲若くは乙の成績品評を附し、各生徒に就き、其入選の度數と成績とを考へて、一等、二等、三等及び等外の四種に別ち、一等には、賞牌、二等三等には、賞品を授與せらるる答な

學年	一等	二等	三等	等外	等外	入選	全員に對する入選者百分比
第一學年	一	五	三	八	一〇八	一〇八	九〇、七六
第二學年	二	三	一八	六	九四	九四	八七、八四
第三學年	一	一四	一八	四	四九	四九	八四、五〇
第四學年	一	三	一〇	五	三三	三三	六、五〇
第五學年	二	五	二	一	一〇	一〇	八〇、三六
計	七	元	六	二六	二一七	二一七	八五、〇九
中隊	一等	二等	三等	等外	總入選	全員に對する入選者百分比	一人平均入選度數
第一中隊	三	三	七	五	一〇八	一〇八	九〇、三三
第二中隊	二	九	七	七	二九	二九	八、八九
第三中隊	一	二	一四	六	三三	三三	一、七二
第四中隊	一	六	三	七	一〇	一〇	一、九二
計	七	元	六	二七	二一七	二一七	一、〇六

(河村宜介記す)

画道部展覧會記事

十月十八日、例年の如く開校記念日を以て、我が書道部成績品展覧會は催された。而して、今回は、専ら左の方法によつて、成績品此人でなければ得られない。松村君の花瓶、君の獨創的考案は、此の種のものの精々もすれば無味乾燥に陥らんとするのと異つて、拘すべき雅致を生み、豊富なる色彩を出し、眞に、敬服の至りである。五年の林、竹内兩君の用器畫は、さすがに緻密にして、精巧な製圖と思つたる。

次に家庭製作の部では、三年の鮎川君の油畫が當日の傑作で、最も共鳴を感じた繪であつた。松村君の出品は、多く見受けられたが、就中水彩畫の鉢植は、水際立つて香く見えた。世其君の寫生畫は丁寧な繪であり、都野君の垣根の花弁は眼新しく感じた。四年の上川君。一年の田村君の臨畫はともに上出来であつた。個人の批評はこれに關いて、總体では前述の如く、實質に於いて前年より進歩してゐるが、將來に於ては、なほ、一層の努力を諸君に望む次第である。

左に本年の各學年及各中隊の成績表を示す。

學年	一等	二等	三等	等外	出品總數	生徒數百分比
第一學年	一	六	一四	九	三三	六四、八
第二學年	二	七	一五	一〇	三六	七〇、五
第三學年	一	七	一五	二	三九	六四、八
第四學年	一	七	二五	二	三九	六四、八
第五學年	二	七	二二	一〇	四七	五九、
計	七	三三	六六	二五	一三三	七二、七

中隊別成績表

品の審査が行はれたのである。
(一)今回陳列セルモノハ昨年十一月ヨリ、本年九月迄ノ間ニ學
校ニ於テ、成テセシメシ全生徒ノ成績品ナリ。
(二)等級ハ平常佳作ノ多少ト、其ノ成績ノ優劣トヲ考査シテ定
メシモノナリ。
されば、成績品は、今迄のそれとは異つて、絢爛、脂肪の氣分は
なく、何となく空が寂しく、且つ、地味であつた。それで、觀客
の眼を喜ばす事は出来なかつた。しかし、各自が、偽らざる自己
の胸の父音を發して、直ちに美てふ母音に合した響音である丈、
それ丈、眞摯であり、それだけ貴くあつた。
出品總數は三百五點で、内、一等七名、二等三十三名、三等六十
九名、等外七十五名である。
其優秀者の姓名、畫題は次の様であつた。
一年 吉村喜然(花瓶とアルバム) 臨畫
二年 三月彌夫(鯛) 臨畫
三年 三好城典(石膏像) 寫生
三年 松村六郎(花瓶) 考案
四年 露海 一(人物) 二十分間看取
五年 林 尙武(螺旋製圖) 用器畫
五年 竹内眞一(相貫体ノ断面圖) 用器畫
一年 吉村君のは、要するに位置法が巧妙であつた。三戸君の作品
には、いつも感服措く能はずである。そのキビキビした筆致、鮮
明な色彩、君の天才的佛を偲はせる。三好君、君の深刻なる手腕
は確に一新機軸を出してゐる。その不思議な魅力と、暗示とは、

中隊	一等	二等	三等	等外	出品 總數	中隊全生徒 受賞百分比
第一中隊	一	六	九	三	六	五、一
第二中隊	一	一四	三	三	八	七、三
第三中隊	一	六	五	五	九	六、五
第四中隊	四	七	三	五	七	七、三
計	七	三三	九	五	五五	七、三

(H O 生)

地理歴史部展覽會記事

我が部は、十月十八日の開校記念日を以て、地理歴史部出品展覽會を催しぬ。今回の陳列品は、左の課題成作品中より、選抜したるものにして、入選總數五十八點あり。

第三學年 露西亞本國の地圖
 第二學年 我が村若しくは附近の名士
 第一學年 歴史地圖及び系圖年表等

而して本年の出品物は、一般に昨年より其の美麗なる點、又熱心なる點に於て、大いに優れたり。中にも第一學年吉武君の歴史地圖、第二學年櫻井君の製作品等は、其の美洵くが如く、實に感ずるに餘あり。殊に第三學年堀、長嶺、内田三君の地圖たるや、實に今回の白眉とも云ふべく、其の考案の妙、其の色彩の美、實に君等が努力熱心の賜と云ふべし、大いに賞讃すべく、且つ模範とすべきなり。諸君來年度は今一層奮勵努力して、益々我が部の進歩發展を期せられんことを望みて已まざるなり。

武道大會

十月三十日、秋季武道大會開催せらる、其の詳細は、次號に於て報道すべし。

左に本年の受賞者の成績表を示す。

學年	一等	二等	三等	入選者	入選割合
第三學年	三	二	二	五	二五、七
第二學年	一	八	二〇	九	一七、六
第一學年	一	五	八	四	一三、〇
計	五	一五	二〇	一七	一七、六

(岸 新一記す)

表彰式

十月三十一日、本日の佳辰を以て、金子先生の十年勤続表彰式を舉行せり。其の表彰文は左の如し。

本校教諭金子乙助君國語漢文科ヲ以テ明治四十年ヨリ任ニ就カレ爾來職ニ在ルコト此二十年其間一意勤勉教授ニ工夫ヲ凝シ訓練ニ懇誠ヲ輸シ其熱心ナル盡力ト熟練ナル畫策トハ善ク衆生ノ奮勵ヲ鼓舞シ斷エズ本校ノ幸福ヲ増進セリ其功績ノ顯著ナル洵ニ本校歴史ニ光輝ヲ添フルモノト謂フベシ爰ニ天長節祝日ニ當リ吾校友會ハ君ノ爲ニ功績表彰ノ式ヲ行ヒ謹シテ青銅馬形置物一箇並ニ朱漆置物臺一箇ヲ贈呈シ以テ記念ト爲ス冀クハ君益

會友訃音

第十三回卒業生上岡謙記雄君は、大阪府立醫科大學在學年、大正六年二月十七日、病を以て、逝去せられたり。
 第十三回卒業生竹内久治君は、糖漬岩井商店在勤中、大正六年三月二十六日、病歿せられたり。
 第十三回卒業生馬場健一君は、朝鮮京城漢湖農工銀行在勤中、大正六年八月中旬、游泳の際、過つて溺死せられたり。

國家ノ爲ノ本校教育ノ爲ノニ其健康ヲ保全セラレンコトナ
 大正六年十月三十一日
 山口縣立萩中學校校友會長 岩田博藏

尙本校同窓會よりも記念品を贈呈せり

七たびも、生きかへりつゝ、夷をば、
 攘はむこころ、吾忘れめや。
 松陰

二宮久氏來校

一月二十四日、午前六時四十五分、武徳會劍道範士二宮久氏來校、劍道寒稽古を視察し、武道に關する一場の談話を試み、同七時半辭去す。

長距離競走

二月十日、午前十一時二十七分より、折からの降り頻る雪を冒して、萩一周長距離競走は舉行せられぬ。校長梅村教諭又之に參加し、大に士氣を鼓舞せられしかば、生徒の元氣、一層の旺盛を呈せり。午後一時五十三分終了。其の成績左表の如し。

等級	隊名	隊員	不参加	出發人員	落伍人員	到着人員	經過時間	平均一人時間
一	四	二二	一六	七	八	四六	二五、三	
二	一	二五	一九	二	九	四八、八	五八、三	
三	三	二〇	一五	二	三	五三、六	六二、五	
四	二	二八	二〇	五	三	五二、〇〇	六四、四三	

第四中隊優勝旗及び賞品を得たり。

野外演習

二月十七日、野外演習舉行せらる。午前八時中、第三年級以上

我の斥候は、互に衝突を始め、漸次、演習は經過しつつ、東西兩軍は、中波一三見道と、樞現山麓に通ずる玉江川の支流との間に於て、激戦をなし、突貫突撃を實施し、演習を終了せしは、午後二時頃なりき。

それより、演習隊は歸校し、空包返納、武器の手入をなし、山本教諭より、大體の講評ありて解散せり。

陸軍記念日講話

三月十日、陸軍記念日なるを以て、陸軍歩兵大佐北川爲吉氏來校一場の講話をせられたり。氏は歐洲戰爭の概要より説き起して、日露戦役と歐洲戦役との比較に及ぼし、最後に、之より得たる教訓を述べて結へり。

福田陸軍歩兵大佐來校

三月十四日、福田陸軍歩兵大佐來校、一場の講話をせられたり。氏は參謀本部附にして、曩に歐洲大戦亂視察の爲、露國軍に従ひ、親しく戦線の間を馳驅して、其の實況を探られたるが、這般、報告の爲、歸朝の途次、展幕旁、郷里たる當地に立寄られたるを幸に、一場の講話を懇望したるに、快諾を與へられたるなり。(講話要旨略、(預備に在り))

卒業式

三月廿二日、午前十時より、第十七回卒業證書授與式を舉行せ

は、武装をなし、本校寄宿舎前に集合。武器、服装検査の後、山本教諭より、演習上の諸注意ありて、二箇中隊に編成。東西兩軍演習隊に分ち、西軍は中村教諭、東軍は山本教諭指揮の下に、午前十時出發演習地に向へり。

西軍想定

一、仙崎方向ヨリ東進シタル西軍支隊ハ、二月十七日午後、其ノ前衛ノ先頭ヲ以テ、倉江ニ達ス。此時支隊長ハ、該地ニ宿營スルニ決シ、前衛タリシ第一中隊ヲ以テ前哨トシ、玉江浦東端附近ニ位置シ、右翼樞現山ヨリ、左翼橋本川ニ至ル間ヲ警戒セシム。

此時迄ニ得タル情報左ノ如シ
兵力不明ノ敵歩兵ハ、大田方向ヨリ前進シ、明木市ヲ通過シ、其斥候ハ、樞村大谷附近ニ出沒セリ。

東軍想定

一、敵ヲ擊滅スベキ任務ヲ有スル東軍支隊ハ、二月十七日早朝、大田ヲ出發シ、同日午後、其ノ前衛ノ先頭ヲ以テ、樞村ニ達ス。此時支隊長ハ、我ト略々同等ノ敵歩兵、仙崎方向ヨリ前進シ、倉江ニ到着シ、該地ニ宿營セントシ、其ノ前哨ヲ玉江浦東端附近ニ出シタルノ報ニ接シ、前衛タリシ第一中隊ニ左ノ要旨ノ命令ヲ下ス。

前衛ハ速ニ玉江浦附近ノ敵ヲ攻撃シ該地ヲ占領スベシ。
右想定により、西軍中隊長は、部下中隊に命令を與へ、小哨、歩哨。斥候を出して警戒せり。
東軍中隊長は、第一小隊を尖兵とし、樞村方面より前進し、彼

らる。知事代理として、笹井理事官臨場せられ、能美少將以下十餘名の來賓あり。例により校長勸語を奉讀し、卒業生六十九名に、卒業證書を授與せらる。次ぎて知事代理の、懸賞與規程に據れる賞品の授與あり。終りて校長左の告辭を述べらる。

卒業生諸子に對し、一言します。

第一、諸子今日の歡喜は、一種言ふべからざる所の者ありと信するのであります。しかし、此の歡喜は、弛緩的の性質のものではなくて、緊張的のものでなくてはなりません。恰も武士が君命を辱うして、戰場に突進する際のやうな歡喜でなくてはなりません。

第二、物には、固體・液體・氣體の三體がある如く、國家の状態にも、亦、此の三體の事狀がありませぬ。一介の書生が一躍して、高位高官に上る時代は、氣體乃至液體の状態で、明治維新の際の如きは、此の徑路を踏んだものも少くはありませぬ。社會が秩序立つて、固體の状態にある時には、かゝる徑路に由らうとするのは誤りである。どこまでも、一步は一步より堅く、日に月に精勵刻苦の實力を積んで、始て成功を得られるものである。歐洲に戰爭が始つてか

ら、聊、世界は動搖しだした。此の際に於て、我國の實業社會に、一躍して成功したのもあると聞きました。諸子、よく、社會狀態を研究して、其の時代と、其の事實との關係を明にすることに努められよ。

第三、建築物の一角に、傲然と構へ居るものは鬼瓦である。下に隠れて、建築物を支持するものは土臺である。社會の者は、此の鬼瓦にならうと希望する者が多いけれども、鬼瓦だけでは、建築物の保全は、決して出来ませぬ。土臺が建築物の保存上、必要なものであるといふことを、忘れてはなりません。生物の發育を見るに、目に見えぬ地下の水を取つて、始めて發育します。諸子よ、希くは、此の鬼瓦にのみ眼を着くることなく、慎重に考慮せられんことを。諸子が、今、此の比較的平靜なる學窓から、風波の荒い社會に出るときは、少からず心の静けさを破るものであるから、よく心して、精神的に、肉體的に、健全な發達を遂げられんことを希望します、之を以て告辭とします。

次に笹井氏によりて、長官の告辭代讀せらる

卒業生諸子ニ諒グ諸子ハ今ヤ中學校ノ課程ヲ修了シ茲ニ卒業ノ榮ヲ荷フ是レ實ニ多年切礎淬礪ノ結果ニシテ諸子ノ爲今日ノ成業ヲ祈レル父兄諸君ト共ニ本官ノ深ク喜ブ所ナリ惟フニ今後進マデ高等ノ學術ヲ修メ或ハ直ニ各般ノ業務ニ從フ等其ノ嚮フ所固ヨリ一ナラザルベシト雖均シク國家ノ中堅トシテ國運ノ發展ヲ期スベキ重大ナル責務ヲ有スル者ナリ然モ進取ノ氣象ト剛毅ノ精神トニ因リ修養鍊磨ノ功ヲ積ムニアラズンバ安ソク能ク大成ヲ期スルヲ得ンヤ今ヤ世界ノ大勢ハ大ニ國運ノ發展ヲ促シ國民相率ヰテ徳ヲ修メ智ヲ研キ産ヲ治メ業ヲ興シ大ニ國本ヲ培養シ國威ノ對揚ヲ期スヘキノ秋ナリ諸子宜シク己修ノ教訓ヲ服膺シ身證ヲ鍛ヘ精神ヲ練リ貫クニ忠孝ノ大義ヲ以テシ各自ノ志業ヲ大成シテ以テ國家ノ進運ニ貢獻センコトヲ期スベシ之ヲ告辭トス

大正六年三月二十一日
山口縣知事從四位勳三等 林 市 藏

次に能美少將來賓總代として、祝辭を述べられ、第四學年田中政太君、在學年を代表して祝辭を朗讀し、卒業生總代宮崎恒介君、答辭を讀み、十一時を以て式全く終りたり。

第十七回卒業生氏名 (イロハ順)

糸賀 真喜	原田 俊人	原 新作
仁尾 重人	時山 孝一	岡田 守也
岡崎 文次	岡村 信一	河内 利作
芳村勝三郎	田中 忠介	谷井 完
高洲 豊	田村 正吉	谷村 芳一
津森 象一	津森 篤郷	津森 篤介
長嶺元二郎	中島 武彦	中津江延彦
中野 治作	村田 了介	椛木 正利
村岡 幸吉	村上 敏憲	上田保治郎
植村 豊	宇野 徳兄	大野 寛
大谷 直弼	桑原 秀一	久保田幸事
熊谷 金伍	倉重 義雄	桑原 芳樹
山本 清	山田 正武	松尾 剛介
増野 兼寛	藤井 元治	福本百合彦
福谷亥之助	兒玉 義清	厚東銀六郎

小谷 正勝	秋山 宗一	齋藤 清治
齋藤 虎雄	齋藤 剛	坂本 四郎
木村 幸一	木村 清一	木島 清七
來島 眞介	宮本 謙助	光永 興之
三輪 杉門	三輪 馨	宮崎 恒介
三好 忠良	宮津 精一	進藤 常雄
重友 毅	白井 正夫	守永 敏一
杉山 貳顯	末山 正顯	鈴木 昭夫

當日の受賞者左の如し。

一、銀銅時計 壹個 懸賞典規程に據る者

宮崎 恒介

原田 俊人

齋藤 清治

一、牛紙貳束

右本學年間精勤シ學力優秀ニシテ克ク校則ヲ守リ且伍長トナリテヨク其ノ任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞典ス

長嶺元二郎

同 岡崎 文治

同 兒玉 義清

同 進藤 常雄

同 三好 忠良

同 木村 幸一

同 齋藤 剛

同

右本學年間伍長トナリテヨク其ノ任務ヲ盡シタルニ依リ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、精勤賞狀

- 倉重 義雄
- 白井 正夫
- 松尾 剛介
- 時山 孝一
- 末山 止顯
- 來島 眞介
- 小谷 正勝
- 中津江延彦
- 蓮藤 常雄
- 宇野 徳兄

右本學年間精勤セシニヨリ之ヲ賞ス

賞品賞狀の授與

四月八日午前八時より、始業式舉行せられ、校長より一場の訓話あり。終りて、賞品賞狀の授與ありたり。

受賞者並に賞品左の如し。

- 一、半紙武東宛 第四學年 田中 明三 第三學年 石田 藤一
 - 同高羅 芳光 同福川 秀夫 第二學年 矢島 眞雄
 - 同福本 稔甫
- 右本學年間精勤シ學力俊秀ニシテ克ク校則ヲ守リ且伍長トナリテヨク其ノ任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス
- 一、半紙一東宛 第四學年 田中 政太 同金子 重雄

御發徳に關する講話ありたり。

學友長の改選

四月二十八日、各學友區の學友長及び副長の改選行はれ、左の如く決定せり。

- 東秋學友區 區長 田中 教諭 副長 溝部 倫
- 第一小區學友長 林 尙武 副長 吉村 潤一
- 第二小區學友長 櫻井 義彦
- 西秋學友區 區長 池上 教諭 副長 武田 正
- 第一小區學友長 金子 重忠
- 第二小區學友長 阿武 次郎 副長 三井 資雄
- 南秋學友區 區長 相島 教師 副長 井上 盛義
- 第一小區學友長 花田 好定 副長 田中亥之助
- 第二小區學友長 友森 茂人 副長 河上 勇治
- 第三小區學友長 綿谷 三郎
- 北秋學友區 區長 元重 教諭 副長 横山 眞晴
- 第一小區學友長 今田 泰 副長 伊藤 敏三
- 第二小區學友長 尾崎 信一 副長 篠原 茂一
- 第三小區學友長 阿座上源助
- 中秋學友區 區長 安藤 教諭 副長 田村 春秋
- 第一小區學友長 田中 政太 副長 草刈 稔
- 第二小區學友長 坪井 七郎 副長 西永 彰治
- 第三小區學友長 大崎恭次郎

昭憲皇太后式年祭式

四月十一日、午後一時より、講堂に於て、昭憲皇太后式年祭式舉行せられ、梅村教諭の、皇太后の

椿東學友區 區長	木田 教諭	副長	國重 誠
第一小區學友長	中村 博	副長	戶倉 靖次
第二小區學友長	岩崎 小一	副長	磯松 嶺造
第三小區學友長	岡 五郎	副長	田總百合之助
學友區 區長	田總百合之助	副長	小澤 重一
第一小區學友長	平田 繁一	副長	中村 岩穂
第二小區學友長	竹内 真一	副長	伊藤 五一
山田三見學友區 區長	山本百合熊	副長	原田 信次
第一小區學友長	前田 吉久	副長	高 義秀
第二小區學友長	高原 啓介	副長	高 勉
第三小區學友長	金子壽三郎	副長	

高木男爵講話

四月三十日、明倫館に於て、醫學博士高木男爵の講話あり。教員生徒一同聴講に赴く。氏は劈頭に於て、我國民の體格が、漸次薄弱に趣きつゝあることを痛く慷慨し、世界各國の死亡率を比較して、我國の最も不成績なることを證明し、殊に、女子の死亡率の、男子のそれに比して高きは、衛生の一大不面目にして、國民全體の體格の弱くなる基は茲にありと喝破し、體格の弱くなる原因を、繪畫を用ゐて説明し、これ畢竟西洋教育模倣の弊なりと斷じ、大に我國の武士道教育を推奨して局を結べり。

修學旅行

五月十五日、午後十一時、第五四兩學年生徒約百三十名の修學

旅行隊は、足立、金子、梅村、池上、山本諸先生引率の下に、九州に向つて出發し、大牟田、炭坑其の他の見學を終へ、多大の智見を得て、同十九日午後四時、無事歸着せり。其の狀況は載せて、旅行欄にあれば、就いて見るべし。

一日旅行

五月十九日、第三學年以下、左の處に、何れも、一日旅行せり。
第三學年 玉江鑛山 第二學年 川上村 第一學年 笠山

清須海軍少佐講話

五月二十六日、午前八時より、生徒一同を講堂に集め、海軍機關少佐清須勝助氏の、海軍思想養成に關する講話あり、同九時結了す。

江部文部省視學委員來校

六月二十六日、文部省視學委員江部淳夫氏來校、主として、修身科の授業を參觀し、後生徒を講堂に集めて、一場の講話を試みられ、同十時半辭去す。(講話要旨詳見演習參照)

古谷實氏講話

七月三日、第九回卒業生古谷實氏來校、南洋に關する一場の講話をせられたり。講話要旨詳見演習參照。氏は南洋に於て活動中の人物にして、今回歸朝せられたるは、大に南洋殖民熱を鼓吹して、青年を誘

ひ、此の一大富源地に於て、殖産事業に従事せんが爲なりと云ふ。因に、氏は今回南洋土産として、生きたる鯛魚の兒、椰子の實、蠟の塔を本校に寄贈せられたり。

林本縣知事來校

九月一日、本縣知事林市藏氏來校せられ、生徒を講堂に會して、訓示する所ありたり。(講話要旨は載せず、演習欄に在り)

和田準介氏講話

九月十九日、第二回卒業生元東京商船學校教授和田準介氏來校、生徒に對し、海軍思想養成に關する一場の講話を試みられたり。(講話要旨は載せず、演習欄に在り)

福原男爵來校

九月二十五日、貴族院議員福原男爵來校せらる。男爵は今回展覧の爲め、當地に來られしが、校長の懇望を快諾し、生徒に對し一場の講話を試みられたり。(講話要旨は載せず、演習欄に在り) 因に、男爵は、元治元年京師の變に國難に殉ぜられたる三大夫の一人、故厚狹郡宇部の領主、贈正四位福原元圓公の今孫に當らると云ふ。

小野下關郵便局長來校

十月六日、下關郵便局長法學士小野孝三氏來校、午後一時より、一般保險及簡易保險に關する一場の講話あり。氏は先づ保險

の起因を説きて、「人間終局の目的は、衣食住足りて、百年の齡を保つにあり。而して、吾人は、此の目的に向つて、活動しつゝあるなり。活動の意義は二つあり。甲は、宇宙自然の力を、生活上に利用すること、乙は、自然の力の、我々に與ふる妨害を取除くこと、即ち是なり。然れども或點以上は、人力は自然力に抵抗すること能はず。我々は、かかる場合に處して、之を如何に考ふるか。無智の者は、已むを得ぬこととして諦めん。然れども、具眼の士は、必ずや、之を救済補填する方策を講ずるならん。而して、此の方策を稱して保險と云ふ。故に保險は、一の慈善的事業なり。」と云ひ、それより保險會社の、世人に投機的事業視せられし原因を述べて、「法の惡しきにあらず、之を運用するものが惡しきなり」と慨し、今や主務省の監督行き届き居れば、保險業者は不都合なるものなし」と注意し、次に、保險事業の會社に及ぼす利益を述べて、「直接には、不時の損失、又は入用に對して、救済補填をなし、間接には、國家の繁榮を來し、社會の進歩を招くものなり」と之を反覆詳説し、最後に、簡易生命保險の事に及ぼし、其の特徴を列舉して局を結べり。時に二時十五分。

第十八回創立記念式

十月十八日、午前八時三十分より、本校第十八回創立記念式舉行せらる。小倉大佐以下三十餘名の來賓あり。校長の式辭、野北少佐の祝辭等ありて、同九時終了す。

各中隊學科成績調査

本年度より、各學期毎に、各中隊の學科成績を調査して之を比較し、以て其の優劣を定め、最優秀隊には、他の競技に於けると同じく、其の名譽を表彰する爲め、星章を與へて、之を中隊旗に附けしむこととなりたり、今第一學期に於ける成績を示せば左の如し。

等級	中隊名	受験人員	合點	平均點
一	第二中隊	二三	八五八	七三、六
二	第三中隊	二六	八四四	七三、五
三	第一中隊	三三	八七二	七三、三
四	第四中隊	三三	八六三	七三、三

送迎彙報

○一月八日、教諭元重且二先生の紹介式行はる。先生は今回大分縣立大分中學校より轉任せられ、國語及漢文科を擔任せらる。
○三月二十日、囑託教師森又雄先生の告別式行はる。先生は、這回、大阪府立天王寺中學校に轉任せられたり。

志 遂 爲 俊 士。
俗 子 難 與 議。

計 蹶 爲 囚 奴。
成 敗 論 丈 夫。
松 陰

附 録

山口縣立萩中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に濫關す○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改めて山口中學校の分校として大に教則を改正す○十七年山口中學校の高等中學校となり文部省の所屬に歸するに及び三月十一日を以て本校は萩分校と改稱せられ高等中學校の豫備校となれり○二十年四月一日改めて萩高等小學校別科と稱せられ重見經誠氏主幹となる同年八月重見氏轉任し綿貫謙輔氏代る○同年十二月萩學校と改稱せらる○二十一年一月職制の改正あり綿貫氏校長に任せらる○二十三年四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所營に歸せり○二十九年九月防長教育會之を本縣に寄附し山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正す○四月一日綿貫氏萩分校主事を命せられる○三十年八月三十一日山口縣尋常中

學校萩分校と改稱せらる○三十一年三月教諭渡邊盛次郎代りて主事心得となる○同年四月邊渡盛作氏主事に任せらる○三十二年九月一日分校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣令を以て規則を發表し職別並に事務章程を定められ元萩分校生徒二百九十三名に加へて新に百十名の入學を許し渡邊盈作氏校長心得を命せらる是より先校舎は江向村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築校舎に移る○同月十八日雨谷羔太郎氏校長に任せらる○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念日と定む○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ卒業生三十七名是月始めて補習科を設く○三十五年二月新築寄宿舎を開き舎生を收容す○同年四月十七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名○三十六年三月二十九日第三回卒業式を行卒業生五十一名○三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十二名○同年十月十二日雨谷校長病歿せられ教諭塚本又三郎氏校長事務取扱を命せらる同年十二月七日塚本氏校長に任せらる○三十八年三月二十七日第五回卒業式を行ふ卒業生四十三

○四月九日、教諭中山壽一先生の紹介式行はる。先生の擔當は英語科なり。
○七月九日、劍道指南手久保田淺之允先生の告別式行はる。先生は、今回、大島郡久賀警察署に轉せられたり。
○九月十日、教諭足立喜三郎先生の告別式行はる。先生は今回廣島縣三次中學校に轉任せられたり。○第十六回卒業生原芳樹君、劍道指南手を命ぜらる。
○九月二十六日、教諭清水敏二郎先生の新任式舉行せらる。先生は、當度、兵庫縣水上郡立實科高等女學校より轉任せられ、物理化學の教授を擔當せらる。
○十月二十七日、英語囑託教師グレイム先生の告別式行はれた。先生は當度歸國の上、獨逸國魯爾の軍に参加せらるべしと云ふ。
○教諭東暢先生は、病氣の故を以て、辭表提出中の處十月二十六日附を以て、依願免職の辭令ありたり。

名、是月縣令を以て共通入學試験の制を定めらる
 ○同年八月塚本校長第二高等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務取扱を命せらる○九月長崎縣立島原中學校校長石重雄氏校長に任せらる○三十九年三月二十七日第六回卒業式を行ふ卒業生六十一名○四十年三月二十三日第七回卒業式を行ふ卒業生五十六名○四十一年三月二十四日第八回卒業式を行ふ卒業生四十四名十一月三日戊申詔書奉讀式を講堂に行ふ○四十二年三月二十三日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名本年より縣令を以て共通試験を廢せらる○四月三十日羽石校長岩國中學校長に轉任せらる○五月七日熊本縣立八代中學校長村上俊江氏校長に任せらる○七月七日戊申詔書奉讀心得を願つ○四十二年三月二十四日第十回卒業式を行ふ卒業生四十九名○十二月一日寄宿舎の名を定めて誠之學舎と云○四十四年三月二十四日第十一回卒業式を行ふ卒業生四十七名○四十五年三月二十四日第十二回卒業式を行ふ卒業生五十二名○七月一日久原氏奨學金給與規程成る○大正二年二月七日訓令第五號を以て山口縣立中學校共

通入學試験施行規程を定めらる○三月二十七日第十三回卒業式を舉行す卒業生九十五名○十一月四日久原氏奨學金給與規程第五條の次に現第六條を追加し元第六條以下を順次繰下ることゝなれり○三月十九日第十四回卒業式を舉行す卒業生五十九名○四月二十日第十五回卒業式を行ふ卒業生六十七名○五年三月二十四日第十六回卒業式を行ふ卒業生六十九名○八月三十日村上校長退職せらる○九月二十五日愛媛縣立松山中學校長岩田博藏氏校長に任せらる○十一月三日立太子禮奉祝式を舉行す○六年二月四日皇后陛下御眞影奉戴式を行ふ○三月二十二日第十七回卒業式を行ふ卒業生六十九名

俛伏出_レ股_下 費卷置_レ廁_中
 烈夫不_レ厭_屈 隱忍成大_功
 松陰

職員表 (大正六年十月末現在)

受持學科	職名	就職年月	氏名	原籍地
修身 英語	校長	大正五年九月	岩田 博藏	山口縣
算術代數幾何	兼舍監	明治三十四年五月	藤原 甚吉	同
英語	兼舍監	明治三十二年九月	頓野 多介	同
國語漢文作文	同	明治三十二年九月	安藤 紀一	同
代數 幾何	同	大正二年四月	木田 藤吉	三重縣
英語	同	明治四十二年五月	山元章次郎	滋賀縣
博物	同	明治三十八年五月	田中 市郎	山口縣
國語 作文	同	大正六年一月	元重 且二	大分縣
英語	同	大正二年四月	廣田 近三	大阪府
國語	同	明治三十八年四月	田總百合之助	山口縣
國語漢文作文	同	明治四十四年四月	金子 乙助	同
國語	同	大正四年十一月	梅村 清光	茨城縣
歴史	同	大正五年十二月	池上鋼他郎	石川縣
地理	同	大正六年九月	清水敏二郎	廣島縣
物理 化學	同	大正五年一月	船木 秀一	山口縣
代數 幾何 三角法	同	大正六年四月	中山 勝一	佐賀縣
英語	兼舍監	大正五年十二月	猪川 繁次	愛媛縣
國語漢文作文	兼舍監	大正五年十二月	猪川 繁次	愛媛縣

學級數及生徒數表 (大正六年十月末調査)

種別	補習科	第五學年	第四學年	第三學年	第二學年	第一學年	合計
學級數	1	2	2	2	3	2	13
生徒數	1	26	24	26	27	21	145

武學貸費生表 (大正六年十月末調査)

第五學年 石田藤一 中村敏雄

寄贈雜誌

(自大正六年一月至同 年十月)

- 一 校友會報 第二號
- 一 校友會報 第十六號
- 一 三田評論 每 號
- 一 校友會雜誌 第二十號
- 一 校友會雜誌 第十七號
- 一 校友會雜誌 第十五號
- 一 校友會誌 第九號
- 一 學友會報 第五十六號
- 一 學友會報 第五十七號

- 室積師範學校
- 岩國中學校
- 三田評論社
- 大島商船學校
- 九州藥學專門學校
- 豊浦中學校
- 周陽中學校
- 山口高等商業學校

- 一 知道月報 每 號
- 一 マツダ新報 一月號
- 一 早稻田學報 二月號
- 一 黎明 三月號
- 一 陽明學
- 一 道前會報 第三十九號
- 一 保惠會雜誌 第三百一號
- 一 校友會雜誌 第三十五號
- 一 進 修 第十號
- 一 平壤中學校概覽

- 水戸中學校知道會
- 卒業生 中村誠君
- 早稻田大學校友會
- 黎明社
- 陽明學會
- 愛媛縣立西條中學校
- 愛媛縣立松山中學校
- 大分縣立中津中學校
- 鴻城中學校進修會
- 平壤中學校



會 告

- 一、本誌は會友諸君の寄稿を切望す。期限は九月末日までとす。用紙隨意。
- 一、本誌の發行は毎年十一月とす。

大正六年十一月廿七日印刷
大正六年十一月三十日發行

【非賣品】

發行兼編輯者 山口縣阿武郡持村 三輪 昴

印刷者 大津 い わ

印刷所 全 上 山口響海館

